

院内銀山覺書

大野正重



第一章

弥五郎^{やごろう}は、茶室の外に目をやった。辛夷^{こぶし}の若木に花が付いている。木が若いだけに、見事というには程遠く、数えるほどの花がむしろ侘しかった。

「先ずは一服、喫するがよい。」

鮮やかな手捌^{てさば}きで茶を点^たてた義宣が、織部の茶碗を無造作に弥五郎の前へ送った。

「頂きまする。」

「弥五よ、」

「はっ」

「茶の湯の楽しみも、久保田(現秋田市)ではままならぬな。」

「御意^{ぎよい}にござる。」

佐竹義宣^{さたけよしのぶ}は京で晩年の千利休^{せんりのきゆう}に直接茶道を習っている。利休の高弟古田織部^{ふるたおりべ}ともしばしば茶会を開き、招き合う仲であった。織部の作った茶碗を幾つも持っている。だが、主従ともに暇のない毎日である。常陸^{ひたち}水戸から秋田に転封^{てんぽう}されて、まだ一年にも満たない月日である。居城とする久保田城さえ、半ばも建て進んでいない。神明山の台地に土盛りをして、その上ようやく義宣の館が形作られたばかりである。本居は湊城^{みなとじょう}に置いたまま、久保田の築造に当たっている。完成途上の庭の整備をする職人や百姓達の立ち働く姿が、茶室から丸見えである。領主たる佐竹義宣さえ、久保田の町割りの現場に出て、あれこれ直接に指図する毎日である。茶を楽しむ暇など有ろうはずが無かった。

「いま一服どうじゃ、」

「頂戴^{ちようだいつかま} 仕^まつる。」

内膳^{ないぜん} 渋江弥五郎は野袴^{のぼかま}の膝を揃え直して、茶碗を帰した。色褪せた紺の野袴に、これも洗い晒^{さら}しの薄茶の筒袖を着た弥五郎は、どう見ても茶の湯の客にはそぐはない。浪人か、よくて下働きの侍とでもいったところである。主人たる義宣も、同じく野袴姿である。さすがに梅小紋をちらした上物とはいえ、出羽の国、秋田仙北の両郡を支配する太守が、茶の湯に纏^{まと}う代物ではなかった。

「お前を斬ろうとした奴がいたそうな。」

花の香でも愛ずる口振りで、義宣が呟いた。弥五郎は何も聞こえなかったように、黙然と座ったままである。もちろんその一件で、この場に呼び出されたことは承知していた。しかし、うかつに返事のできる事ではなかった。

三日、久保田の町外れで弥五郎に斬りつけてきた三人の男がいた。一人を捕らえたが、二人は逃がした。弥五郎も人並み以上に剣を使えたが、供の仲間二人のうち一人の力が強く、道端の棍棒を拾って振り回したのが、望外の効果を発揮した。捕らえた一人の顔に見覚えがあった。しかし弥五郎はその事は黙って、男を町の番屋の係りに引き渡しておいたのだったが…。

「あの狼藉者が誰の手の者か、弥五は知っておろうな。どうじゃ。」

義宣は二杯目の茶を勧めながら、弥五郎の額の辺りに視線を止めている。弥五郎としては、あのままただの狼藉者と、町番の手の者が切り捨ててくれればいい、などと虫の良いことを考えていたのだが、しかし、そうはいかないことも良く承知していた。土分の者の処刑は、義宣の決定無しに行なってはならぬとの命令を作ったのは、他ならぬ弥五郎自身である。当然ながら徳川の罰則を踏襲したものではあるのだが。

余談ながら、町中の喧嘩沙汰を裁く、統一的法律など当時は存在しなかった。秀吉の石高制制定と刀狩り令により、士農工商の身分が制定されたかに見えるが、そんなことが一夜にして行き渡る道理が無い。刀剣による喧嘩など、斬り殺されたら殺され損、加害者側に非の有ることが明瞭な場合には、見物が棍棒でそやつを殴り殺す事さえ珍しくなかった。誰が彼我を裁くのか、事件の起きた場所により、領主の裁断が異なるのが、当時の常識というものである。

「恐れ入りまする」

弥五郎は後ろへ下がって平伏した。これは義宣が自身で決めねばならぬ事だと、その広くがっしりした背肩が語っている。それは義宣も承知していた。この時期弥五郎を斬って得をする者など、そう多くはいない。

「情の剛こわいやつよ、弥五は。まあよい、冷めぬうちに茶を飲め」

義宣は自分のためにも茶を点て、ゆっくりと味わった。主従の間に、しばらく沈黙の時間が流れた。弥五郎には永い時間であった。

弥五郎、本名渋江内膳政光、天正二年(1574)の生まれであるから、主君義宣より四歳程年上である。もと荒川姓であったが、常陸水戸時代に渋江氏の養子ぶんとなり、すでに渋江と姓を改めていた。当時、改姓等と言うことは、さしたる大事ではない。日本人の大半が姓など持っていなかったのだから、持つ必要があれば適当な姓を名乗れば済んだのである。が、佐竹とか島津とか古来の、由緒ある姓を名乗る者は、おいそれと改姓できない。自由であって、自由でないような、おかしい感無きにしもあらずだが、それぞれの時代の特性というものであろう。

姓など持たない水飲み百姓のこせがれ小倅が、木下、羽柴になり豊臣になっても、誰もそれをおかしいとは思わなかった時代だ。義宣の父、佐竹義重が弥五郎をこしろう小姓として用いていたが、そのつもりであったのであろう、早くから義宣付きとなり、鹿島、なめがた行方攻めの義宣出陣以来今日まで、北条攻め、伊達攻め、そして関ヶ原と、何度かの戦を共に戦ってきた主従の仲である。義宣にとっては、ただの家臣ではなく、少年期を共に過ごした、いわば兄弟にも等しい存在であった。しかし、平安以来、鎌倉、室町両幕府時代を通して数百年、せいわげんじ ちゃくりゅう清和源氏嫡流の格式を誇る佐竹家の内部では、小山浪人を父に持つ弥五郎の存在などは無きに等しかった。

きんじゅう近習などという存在は、重役の子供ならいざしらず、そこらあたりの浪人の子なら、先ずきゅうにん給人（地行の土地をあたえられる家臣）となることは無い。ろくまいと禄米取り（米を現物支給される家臣）として抱えられる。将来の領主に仕え、戦の機会に手柄を立てて取り敢えず給人となり、折を見て一国一城の主になりたい、というあたりがこの頃の近習共の夢というものであったろう。弥五郎も梅津兄弟も、その他若手の家臣達の望みも、たいして違いは無い。下克上のせんごくかたぎ戦国気質の炎が心中で常に舌なめずりをしている。若手としてはそれが当然の当時の世の気風であった。

本来守護大名である佐竹家では、そのあたりが他の戦国大名とは事情が異なっていた。お家代々の重臣という者達が存在し、家老や重役として領地を取り仕切っている。少なからぬ知行地を持ち、その仕切りに付いては、主家たる佐竹家にも、滅多に口出しをさせないほどの威勢を誇っている。こくだかせい秀吉の石高制、刀狩り、身分制の確立の意味など、この者達に分かる筈のないことであった。分からないことを実行するはずが有ろうか。

却って若き領主義宣の方が、三成との親交によって、その政治的意味や目的を理解していた。戦国の世を太平に治め、下克上など起こらぬようにするためには、仕方のない方法なのだ。だが守護大名のなかで分かっていたのは、義宣くらいのものであった。第一秀吉自身が戦国大名、下克上の化身のようなものではないか。秀吉は恐らく自身の老齡(推定53歳)を意識していたであろう。三成もそこを考慮した結果、決断した政策に違いなかった。

だが、若者達の夢と希望をどうする。それ無くして領主の命に従う若者がいるのかどうか、義宣には自信が持てない。持てないままに関ヶ原に臨む羽目に陥った。三成のいうことは分かる。しかし、それは自身をいわば太閤の給人とすることではないか。義宣とて天下取りの夢との矛盾を感じないといえは嘘になろう。しかし天下人が目の前に君臨している以上、どうすることもできない。この矛盾は義宣一人のものではないところに、大きな問題を抱えていた。

第二章

問題は関ヶ原の参戦に関して起こった。義宣始め、弥五郎、梅津兄弟ら血気盛んな若者は、石田三成方に味方して徳川を滅ぼし、石高制、身分制をきちんと整え、そのため一国一城の主に領主として君臨する夢を描いたのである。一知半解と言うべき夢である。秀吉に、つまりは三成の仕置きに従えば、それはできない相談である。義宣としても悩ましい。

惣無事令（喧嘩禁止令）に背いた伊達政宗が、罰として滅封されたのが良い例である。それを承知で三成に味方するか、心中微妙なところがあった。だが領主としては、領内の平安を目的とする三成の仕置きに魅力が有る。矛盾した心を抱えたままの、一応の三成側荷担であった。

それとは逆に、義宣の父義重はかねてから徳川に心を寄せて、関ヶ原の際にも東軍に付こうとし、義重の意を受けた家老河井伊勢守達を押し立てて、義宣の牽制にかかった。義重は、秀吉死後の徳川の手口に、一所懸命の鎌倉幕府再現の幻を見た。彼が直接に表面に出なかったのは、秀吉の存命中、その指示ですでに領主の座を引退して、家督を義宣にゆずっていたからである。秀吉の小田原攻めの時に、石田三成の進言によりこの家督交替が実現した。義宣この時十六歳であった。義重は四十三歳になっていたから、交替の時期としては時宜を得たものであった。佐竹家としては、この小田原攻め参陣が秀吉傘下への初めての意思表示であった。この小田原攻めが唐入りの予行だなどとは義宣は夢にも思っていない。関ヶ原の戦いのそもそもの原因はこの小田原攻めに有ったと言えよう。

義宣には十歳年上の三成の政略判断が眩しかった。そもそも小田原の北条氏（鎌倉時代の北条氏と区別して、後北条氏と呼ぶこともある）が秀吉に攻められるきっかけは、信州上田は真田家の名胡桃^{なぐるみ}城奪取（惣無事令違反）を口実としたものだったが、それはあくまでも口実に過ぎない。実のところは、石高制を命じたにもかかわらず、貫高制を改めようとせず、したがって検地にも応じなかったからである。そのため何度も上洛を促したが、言を左右にして姿を現さない。

北条氏にも言い分は有った。貨幣経済を強行するには、貨幣自体が不足であり、生産物も少なかった。金銭で租税を取り立てることの矛盾に、北条氏も気が付いて、事実上は物納制に変えざるを得なかった。それでも他国よりは割安の租税のために、北条氏の下を離れようとしめない農民が多かった。伊豆相模を中心として関東一円に勢力を持つ北条氏には、農民ばかりではなく、漁師も多く、魚を含む海産物による納税を認めていた。物納制と石高制は一見似ている。同じ事ではないかと思うのも、仕方がない面が有った。

だが全国制覇のための、石高制の意味を理解する参謀が、北条氏にいなかった。というよりも、北条氏は自国領の経営に自信を持ち過ぎて、世の中の変化に気付かなかったのであろう。この石高制実施の総奉行が石田三成であった。天下とは、まつりごととはこういうものであったか、と義宣は感動の眼で、あれこれと指示を下す三成を見つめた。

貫高と石高の現実性と論理制を説明してくれたのも、石田三成だった。

「理屈としては貫高制の方が良いのだ。しかし…」

三成は己の銭入れ袋の紐の口を緩め、中を見せた。小判一枚、丁銀二枚、鑓銭が何枚かが見えた。

「百姓にまで銭が行き渡らないのよ。とどのつまりは米で^{えき}役を納めることになる。となると、その都度、勘定換えを致さねばならぬ。ならばいっそ米勘定そのものの方が早かろうし、分かりやすかろう」

確かに銭を持っている百姓など滅多にいない。秀吉の石高制の布令に、佐竹領がいち早く従ったのは、そんな現実があったからだった。

「なに、石高とはいえ、名前だけのこと、実のところは毎年の取り入れを^{けみ}毛見してみなければ、どれだけ納めさせるか見当もつくまい。だが土地の^{おおやけ}公の値打ちが決まろうよ。それが全国一律となれば、増減の数量も判然とし、賞罰としても分かりがよかろう。どこであろうが、一万石は一万石じゃ、変わりがなければ、いずれの一万石でもよかろうよ」

「麦は役には数えないのは何故であろうか」

「米に換算すれば宜しかろう。それに豆、これは馬の餌じゃ。つまりは兵糧であることは^{おふれがき}御触書の通り、その他魚でも松杉の材木の類でも、米に換算したならば簡単で分かりやすかろう」

そのための全国一律の総険地、総石高制だと、囁んで含めるように三成は説明した。それを義宣は熱心に聞き、傍で弥五郎も、梅津兄弟も聞いていた。

北条氏の勢力は関東一円と言えるほどに広がっている。だが、公称二十万ともいわれる秀吉軍の包圍陣に、攻撃を仕掛ける力を持つ者は只の一人もいなかった。箱根峠の中山城すら、ほんの一刻ほどの抵抗しかできず、^{ひとつやなぎなおすえ}一柳直末（六万石）を鉄砲で撃ち殺したくらいの抵抗しかできないとなれば、小田原の落城は時を待つだけである。無理な戦など仕掛ける必要は無かった。海からの補給も秀吉の水軍に^{はば}阻まれ、あとは大軍の兵糧の尽きるのを頼りにするしか、北条方には手段が無い。ところが秀吉側に兵糧を提供する大名が続々と名乗り出る始末。兵糧攻めにされたのは逆に北条側という皮肉な結果になってしまった。

秀吉は事の序にと奥羽の検地まで始めた。小田原の結果如何と息を潜めていた群小の地方豪族や守護大名が、小田原落城必至とみるや、先を争って秀吉に臣下の礼をとった。その作戦の指揮を執ったのが三成だった。三成自身は秀吉の命で、武州の^{おし}忍城を攻めに出掛けたが、これも本気の城攻めとは到底言えたものではなく、退屈しのぎの遠足のようなもので、水攻めなんぞと余計な真似をしたばかりに、現地徴発の百姓何十人かを水に浚われたのが、一柳を除いては、小田原攻めを通じての、秀吉軍最大の損害ではなかったか。しかし、忍城主成田氏も主人北条氏が降伏したのでは、城の明け渡しもやむを得ない。この忍城攻めに義宣も加わっている。三成の戦ぶりもじっくり見ることができた。妥当なところ、というのが義宣の評価だ。しかし小田原攻めは、秀吉にとって天下統一戦どころか、明国出兵の小手調べに過ぎなかった。

第三章

小田原に参陣しなかった関東から東北にかけての大名、豪族は、容赦なく取り潰された。秀吉自身、会津まで出張っての奥羽検地である。奥羽きっての勢力を誇った伊達政宗さえ、争いを禁じた秀吉の布令に違反した廉で減封された。北辺の津軽、南部まで差し出しとはいえ、検地に応じた。差し出し検地とは、今で言えばさしずめ納税申告書である。書類を提出することで、実際の検地を避けるわけだが、明らかに嘘と分かる書類の提出は、取り潰しの最大の理由になる。ほぼ実状通りの申告がなされた。恐るべき勢いであり、実行力である。

さらに三成は義宣に対して、^{みなかた}南方三十三館の始末を付けてはどうかと話を持ちかけた。現在佐竹が悩んでいることを、かなり詳しく知っている様子である。そのことにまず義宣は感心した。三成は続けた。

「^{わし}儂の名を使っても構わぬぞ。騒ぎをあまり大きくせずにな。」

「しかし、惣無事令に触れることが…」

「収まりは儂に任せておかれよ。御心配無く」

^{なめがた}鹿島・行方地方の豪族を、俗に南方三十三館と呼んでいたが、要するに佐竹家の支配に従わない豪族達である。義重の代に攻め滅ぼした守護大名の残党もいれば、自らの土地への執念を断ち切れぬ郷土もいる。その他野武士に似た一党もあり、何かと佐竹の仕置きに逆らう連中である。三十三は多すぎるといふ意見も有るが、実際には二十あまりの説もあり、その辺が現実的な数であろう。仕置きの采配は父義重が振った。

余談ながら、塚原卜伝とか宮本武蔵などという、個人技としての剣術の名人が出てくるのはこの頃からである。戦は鉄砲の数で決まる。先陣の槍部隊を先ず鉄砲で敗走させる。その後ろに控える騎馬隊も、鉄砲で撃ち取る、残るは本陣の守備隊だが、其処まで裸にされてなお抵抗するとすれば刀を使うしかないが、攻め方は此処でも銃を使うであろう。つまり、刀の出番など無い。槍や刀を必要とするのは、最先端の雑兵部隊で、鉄砲隊がまごついたり、玉が尽きたりして混戦状態になったときくらいである。そのため車に積んだ槍や刀が雑兵隊の背後に控えている。槍はしばしば柄が折れるし、刀は数合打ち合うと刀身が折れたり曲がったりする。銘入りの名刀などこんな所に出ては来ない。いわば二束三文の武器が雑兵のために用意されている。武器の破損した雑兵は此処まで駆け戻って、手当たり次第に槍か刀を引き抜いて戦場に駆け戻る。雑兵隊の後ろには鉄砲隊が控えている。剣術使いなど出る幕が無い。

「石田治部殿が×月×日に太田城を見聞にお出でになる。その際南方の者達にお目通り下さるとの仰せである。治部殿の御機嫌を損じぬよう、お目通り願うがよい。」

おおむねそのような文が南方の者達に送られた。南方の豪族達は太閤とか石田とかという、天下を統^すべる者達について、噂以外殆どと^{しかじかうんぬん}いっていいほど、何も知らなかった。噂によれば

然々云々、日本全国をその手に取めた超大物だ、手向かう者は容赦なく攻め滅ぼされた、くらいのところである。佐竹なんぞ怖くはないが、石田が来るといのが気に掛かる。普段ならいい加減な返事で誤魔化して、こういう危険な招待にのる連中ではなかったが、三成が会うといのが彼等を動揺させた。南方三十三館といっても、一つに纏った存在ではない。小さな衝突なら年中起こしている、いわば日常的な喧嘩相手だ。腹を割った相談などできっこない。それだけに疑心暗鬼にならざるを得ない。自分だけこの招待に応じなかったら、太閤とやらの大軍に潰されてしまうのではないか。上^{うわべ}辺はいつものように平然と構えて、不参のようなふりをしているが、実はこっそり自分だけ出掛けるつもりではあるまいか。

それぞれが、それぞれの腹の内を探りあう。結果、相談など一度もしないのに、義宣狙いの豪族が全員参加と返事をよこした。このことも義宣が三成と親しくなる契機の一つだった。こんな絶好の機会は一生に一度しかないだろう。この機会を作ってくれた三成の知恵と腕の凄いこと、見習わねばならぬと義宣は張り切った。結果、南方三十三館の者達は、太田城中で百五十丁の鉄砲に、一同残らず討ち取られた。これで佐竹家は実質的な常陸の国主になったと言えよう。塚原卜伝などこのこと有るを予期したように、鹿島を離れ諸国回遊に出掛けている。

敵に勝つためにはあらゆる手段、謀略が使われる。戦とはそういうものだ。これは現代の戦争においても揺るぎない戦争の鉄則である。綺麗とか汚いとかは問題外、戦う以上勝たねばならない。

この仕置きは、石田三成の名を騙^{かた}った瞞^{だま}ったし討ちだが、それをつべこべ言う者はいない。瞞される方が馬鹿なのだ。さりとて佐竹の誘いにのらなければ、それこそ三成率いる大軍に摺り潰されることは間違いあるまい。どう転んでも助かる術はない。こうなる前に機転の利く者は佐竹に従うなり、商人に転身したりしている。それが天下の大勢を見る目というものであった。武士の誇りも、戦の大義名分も関係ない。欲望と打算だけが支配する世界である。なんのことはない。大がかりなヤクザ^{でいり}の喧嘩とさして変わらない。秀吉はヤクザの大親分、三成は子分の兄貴株といったところか。

秀吉の全国制覇以来、日本の政治にはヤクザの匂いが纏わり付いている。徳川幕府政権下でも、明治政府に変わっても、この匂いは消えない。さすがに其処が気になる人もいて、新渡戸稲造氏は「武士道」などという著作を書かれたが、さて何処まで信用できるものか。政治はボランティアの行う慈善事業の一種とする、西欧の近代政治の偽善的理念にも、「武士道」では対抗できない。西欧の国々にはキリスト教の理念が強く影響しているらしいが、我が国の「武士道」に、神道や仏教が反映しているとは思えない。とすると、神も仏も原理としては働かない、行き当たりばったりのヤクザ精神が、現代においても、我々の行動原理なのであろう。

以来、義宣はことある毎に、兄貴分の三成に会う機会を作るように心がけた。三成の小田原攻めに当たったの打算と、情実抜きで戦果判定に、義宣は感心しきりだった。小田原攻めについての戦果判定は京都で行われた。特に一柳直末の戦死に対しては、無駄な費用を使っただけの勝利として高い評価を与えず、取り囲むだけで自然に落ちたはずとして、恩賞の対象から外した処置には納得した。しかし、この処置に不満を抱く部将達も少なくなかった。加藤清正や福島正則ら血気盛んな武部将達である。三成は

「あの城は無理に攻めることは無用のこと、只囲んでいれば、自然に落ちたものを。一柳殿も、馬などに乗らずに後陣に控えておられれば、鉄砲などに狙われずに済んだものを。恩賞など以外の外」

秀吉の前で行われた ^{いくさひょうぎ} 戦評議 の席で主張した。秀吉軍の効率の良い戦法の大元が此処にあると、義宣は感服した。当然清正らは、たった一刻余りで山中城を抜いた一柳の武勇を讃えるべきだと声を荒げた。

「無用の戦は避けねばなりません」

三成は何処までも冷静であった。両者の対立はこれが初めてではなかったが、これほど熱を帯びた対立も珍しかった。政略派と武闘派の主張が露わになったのである。

もう一人、三成の政治手腕に注目している大名が居た。上杉景勝である。越後から会津への転封により石高による格が上がった。謙信の部将としての名声は、大名家の間では伝説になりつつある。謙信は秀吉との戦に負けたことがない。景勝も秀吉の威力に屈した事はない。その上杉を越後、佐渡九十万石から会津百二十万石に転封する秀吉の威力は、天下人の存在を、各大名の胸に強烈に刻み込んだ。佐渡と出羽米山を加えた百二十万石である。増加とは言え会津は各地山々に隔てられ、治めにくい領国である。その上出羽領地は最上家の領地に分断された形になっている。最上家からすれば、上杉領に周囲を囲まれた形である。確執のない方がおかしい。景勝も越後の地付きの部下の始末に手を焼いたと、義宣は直接に ^{なおえかねつぐ} 直江兼嗣 から聞いた。大名にとっても、心労と恐怖の的の石高制であり、太閤検地であった。

検地と一口に言っても、なかなか面倒な仕事である。田畑の面積を測量することからして容易なことではない。どういう尺度で計測するのか、がまず問題だ。一間^{いっけん}の寸法は何尺何寸か、三成は六尺三寸と定めた。それまでは六尺五寸を一間とする地方も結構有った。だが基本の数字を決めなければ、この仕事の意味がない。一間四方を一坪とし、三十坪を一畝^{いっせ}とする。十畝を一反、十反を一町とした。六尺をもって一間とするのは、後世になってのことである。耕作地の正確な面積をどうやって弾き出すのか。つまり、当時なりの微分、積分の計算が必須となる。誰それ流の検地方法というものが、秘伝のようにして伝えられていたのも、致し方のないことである。

米を量る枡も京枡と定めた。枡にも領主により何種類かの枡が存在し、枡の種類はいわば領主の意向次第であった。それを京枡と決め公開の制度にしたのが、秀吉の、つまりは三成の全国総検地であった。一勺を最小単位とし、十勺を一合、十合を一升、十升を一斗、十斗を一石としてこれ以上の単位はない。

そうして弾き出された田畑の値打ちを収穫量で決めなければ、検地した意味がない。上田、中田、下田、下下田と四段階ほどに、始めは区別されたい。らしいというのは、いかにも曖昧だが、こういう細かい法律が全国に行き渡る時間は、現在の我々には想像の及ばないところである。地方により領主により、それぞれ独特の方法、納め物の種類であったのが、一律に米、豆の収穫量で換算される。これが石高制だ。こうしなければ、天下統一などできはしない。検地の面倒さが、実は関ヶ原の遠因になっていることも知っておくべきことであろう。

ここで筆者なりの疑問をひとつ。石高とは体積である。何故重量を^{えき}役の基本にしなかったのだろう。その理由が分からない。この米計算を体積で行う伝統は昭和二十年(1945)の敗戦直後まで続いた。一升いくらという値段である。決して1キロいくらではなかった。思えば不思議なことである。米は昭和十四、五年頃から配給制になったのではあるまいか。その配給量も、大人一人一日当たり二合五勺、子供は一合何勺などと体積計算だったような気がする。何が科学日本なんだか。さて、閑話休題。

無理は百も承知の上での検地であり、石高制なのだ。多少のゆとりは許されたようだが、大方は秀吉の強大な軍事力に物を言わせての強行実施である。かくて領地安堵の^{はんもつ}判物が、秀吉の名で各大名に与えられた。意味するところは、日本全国至る所が秀吉の所有地であって、大名であっても、その領地はその場限りの預かり物、いつ、何処へ移動を命ぜられても「転・移封」、或いは罰として領地を削られても「減封」、取り上げられても「改易」、文句は言えないということだ。この方法が大名の領地内で、家臣の知行地の与え方にも応用される。

したがって、常陸五十四万石とか、越後高田八十万石とか称しても、その数字は紙幣に印刷された金額と同じ様なもので、実際に使ってみなければ、真の値打ちは分からない。毎年同じように、数字通りの米が収穫されるわけではない。豊作の年もあれば、殆んど実りのない年もある。だが八十万石は八十万石に変わりはない。実質その年の収穫量が五十万石であろうと関係ない。インフレやデフレで物の値打ちに変動が有っても、紙幣の印刷文字に変化が無いのと、理屈は同じだ。日本全国が何百万石か何千万石か、知るところではないが、とまれかくまれ、天下統一が成立したわけである。石高を決めたからといって、そこからの年貢を、秀吉が取り上げるわけではない。年貢はあくまで知行する者の収入である。その年貢を納める農民を申告させた。これが秀吉にとっての石高制に伴う身分制の利点であった。士、農、町人の身分がきっちりと区別された。俗に士農工商と称されるが、この時点で商、工などという身分は、認められていない。

秀吉にとっての身分制の利点は、百石当たり士何人、^{ぶえき}夫役何人という、戦闘要員を決定できることである。士と農との分離が此処ではっきりする。戦だけを専門に行う者達ができたのである。鎌を持つ手に槍を持ち…というそれまでの戦闘員の構成が、がらりと変わった。戦だけではなく、^{くじ}公事として城の建築、道路や川の修理などの^{えき}役も含まれる。

さらに、^{くらいりち}蔵入地が各国の領内に存在するようになった。例えば常陸五十四万石の中に、太閤蔵入地を一万二千石と指定されたとする。この年貢は太閤のものであり、兵糧として、別個に保存しておかなければならない。この管理に代官が派遣されることもあれば、その藩に任されることもある。そして毎年新しい米・豆を入れ替えしなければならない。さらに蔵入地を指定されれば、今までそこに地行地を持っていた者は、他の場所に移動しなければならない。この移動は必然的に押せ押せになるので、一人や一カ所で済むはずがない。この移動先についても、秀吉が直接命じた例が二、三に^{とど}止まらない。一応は、国内の平穩に備えての制度制定という説明であった。だが、見る者が見れば、これは途轍もない大軍を徴発、移動させる仕組みであることが分かる。何がこの後の自分達を待っているのか、不安を感じた大名も少なからずいたはずである。

第四章

義宣が小田原攻めに参戦したのは二ヶ月ほどである。常陸太田城に帰った義宣は、小姓連中相手に、日頃気掛かりなことを茶飲み話の序でのように話しかけた。

「次は何処であろうか」

問いかけずにはいられなかった。

「奥羽は伊達殿が小田原に参戦している以上は、草刈り以上の必要は有りますまい。とすると、蝦夷地（北海道）あたりですか。」

梅津憲忠が低いが良く透る声で、考え考えゆっくりと口にした。誰が考えても、結論はそうなるだろう。草刈りとは、義宣が南方三十三館の豪族や郷土ら相手に行った、領内の反抗勢力の掃除のことである。地付の勢力だけに、それなりの用意と時が必要だ。いつも義宣の時のように、うまくいくとは限らない。だがいずれは家臣として従属するか、敵として殺戮されるかどちらかとなる。

つまり陸奥、出羽地方では大きな戦はもう起きない。伊達家、津軽家、南部家、秋田家と最上家辺りに草刈りをさせれば、一件落着となることは目に見えている。義宣の懸念はその次に来るであろう秀吉の征服欲の的である。四国は無論のこと、九州もすでに秀吉に膝を屈しているという噂である。小田原攻めと前後して、九州にも出兵していたのだ。残る蝦夷地が秀吉の視野に入っているかいないか。いるとすれば、残るはそこしか無い。こういうことは噂としてはかなり早く伝わるが、正確なことはなかなか分からない。忍びとか諜者とか呼ばれる専門家はまだ発生していない。時に応じてそういう働きをする程度であった。

きつと秀吉は蝦夷地遠征を行う。遠征軍の兵力、兵糧ともに確保する手段も整った。石高制と刀狩りによる兵農分離がそれを可能にした。だが、佐竹家に、その秀吉が命ずるところの蝦夷地遠征に対処できる能力が有るのか。義宣と憲忠との問答には、そんな意味が含まれていた。兵員、馬、武器、兵糧等の輸送が問題なのだ。常陸から蝦夷地までのこれらの輸送なんぞ、考えた事もなければ、まして経験した事もない。常陸から小田原まででも、大した距離ではないのだが、それなりの苦心苦労は有った。

「殿下は無理を言われないと存じます。ただ御命令に従うだけに御座りましょう」

弥五郎が口を挟んだ。弥五郎は風の便りに、蝦夷地の始末は付いたことを聞いていた。ただ情報としての確実性がない。九州の場合と同じである。絶大の軍事力と、己の判断力に余程の自信がなければ、二十万人もの動員というような危険な行動はできない。

「すると、そちは蝦夷地征伐は無いと申すか」

「いえ、無いなどと…。ただ無理は仰せにならないと存じます。蝦夷地には確か蠣崎殿とやらがおいでで、穏やかな様子と聞きおります。蝦夷地攻めは無いかと存じますが…」

「成る程、そうとでも考えておかねば身が保たぬわ」

戦における補給の重要性は、今も昔も変わり無い。動員される人員の半分、あるいは三分の一は補給要員である。敵襲に備えての武装として、刀を差すくらいはするものの、直接戦闘に参加することはない。だが荷車に積んだ食料や槍や鉄砲、弾薬、刀などを人が引いたり押したりして運ぶ作業は、考えるだけでもうんざりする。そんな仕事の端っこすらしたことの無い義宣がうんざりするのである。荷車を馬に引かせる馬車方式は、山路の多い日本の地形のためか、この時代には採用されていない。荷物は振り分けにして馬に積んでいる。食料、衣料、治療薬など、大したもの運んでいない。よってこれらの人馬を駄輩と呼ぶ。

騎馬武者の乗る馬は別扱いされる。一騎と称されるのは、この騎馬武者を中心としたグループを指す名称である。換え馬を二、三頭、その世話係が最低五名から百二十名程まで、家格や財の有無により様々であったらしい。この馬には荷物など乗せない。精々が鞍と手綱たづなくらいが付いているだけである。

乗り手の武者も移動中は歩く。乗馬して長距離を移動することなど決してない。そんなことをすれば、肝心の騎馬戦の時に馬が疲れ切っていて、役に立たない。馬は我々の思うほど体力を持つ動物ではない。騎馬武者が戦力として活躍するのは、乗り手が鎧を着、槍を持って乗馬してから三十分以内であろう。それでも槍や刀を持った相手には、決定的な威力を發揮したようだ。だが、鉄砲が主要な武器となってからは、攻撃力としての主役の座から遠ざかった。将としてのシンボリック存在の意味しか無くなった。却って鉄砲の格好の的となる危険性が増したとも言えよう。一柳が良い例だ。

「弥五郎、お主の存念は？」

「口にするのは、いささか鬱陶うっとうしゅうござりますな」

「だが、心構えはしておかねばならぬであろうよ。念のためじゃ。言うてみよ」

「唐入り…あたりでござりましょうか」

「唐入りっ！」

思わず呻うめくような声をあげたのは憲忠だった。

「これっ、人に聞かれてはならぬことぞ」

弥五郎がたしなめた。

「さて、殿下ならば気にもされぬであろうよ。弥五郎まで見当をつけているとなると、冗談では済まぬかも知れぬぞ」

弥五郎の推測は当たっていた。秀吉は奥羽検地の帰り、京都に向かう途中の駿河で小西行長を呼び、唐入りの準備を命じていた。当初こそ極秘とされていた命令だが、この種の情報は秘密を保ちがたい。現に風聞として弥五郎の耳に届いている。

義宣は意外に冷静であった。秀吉のもとへ朝鮮の使者が来るのは珍しいことではなかった。長崎での交易の許可と土産物の献上をかねて、京に上ってくる朝鮮の客は珍しくなかった。義宣もその種の座に一、二度連なったことがある。織田信長の在世中、^{えりぜにれい}選銭令を何度か出したことがあったが、要するに日本の銭の鑄造技術が、渡来ものの銅銭とは比較にならないほど粗悪で、国産銭四枚が渡来銭一枚前後の相場だった。輸入品の大量の品目は生糸の次が銅銭だったのである。銅銭を買うのに銀を使ったのだ。その銀ですら彼の地の純度が高かった。朝鮮の宗主国として明国がひかえていることも、秀吉は承知している。交易の当事者としては、対馬の宗氏があたり、言葉も自由にやりとりできた。大名の中でも、商人上がりの浮田秀家などは、陰に陽に商いをしては巨額の利益を挙げていた。言葉も秀家自身片言ほどなら会話ができたといい。そこから秀吉が察した朝鮮の政情が問題だった。李朝の腐敗と派閥争いの、泥沼のような現状であった。秀吉の狙いは既に李氏朝鮮にはなく、明国にあった。唐は朝鮮、鴨緑江を越えた向こうはモロコシと呼び慣わしてきたはずが、いつかモロコシが唐になり、朝鮮は唐の一部としか、秀吉は考えていない。

義宣も弥五郎も朝鮮攻めまでは何となく想像できたが、明国を目標としているとまでは想像できなかった。第一、朝鮮も明国も同じ唐である。したがって唐入りといっても、秀吉と佐竹主従とは意味が異なり、後者にとって唐入りは二通り有るわけだ。朝鮮攻めと明国攻めと。佐竹主従は朝鮮攻めしか思いつかなかった。秀吉軍が攻め込んでから気が付いたのだ。殿下ならやりかねない。そういうお人なのだ、あのお人は…と。

第五章

文禄元年(1592)秀吉は全国の大名に唐入りの動員令を発した。その為の石高制と刀狩り令、身分制の制定だったと、今更ながら義宣は納得した。だが秀吉の「唐」が明国を意味していることまでは思い至らなかった。朝鮮攻めだけでも、どれ程の負担を負うか、想像する材料もない。

「やはり唐入りか」

義宣は正月の酒を近臣の者達と酌み交わしながら、唇を僅かに歪めて首を傾げた。意に染まぬときの義宣の仕草である。

「予想通りでしたな」

弥五郎は子供が嫌々をするようにゆるゆると頭を回した。小田原の陣からまだ二年も経っていない。陣を構えるだけで、そこそこ^{つい}費えが出て行く。まして実際に刃を交えるとなれば、槍、刀の補充、鉄砲の補充や修理、弾丸の製造や配布などいくら費用がかかるか分からない。

小田原の陣の折には、石田三成の手勢と共に武州の忍城に出陣している。さいわい相手の成田氏が籠城を決め込んだため、実戦に及ぶことにはならなかったが、二千人余りの軍勢を移動させることだけでも、結構な物いりなのだ。

「殿下は何時までに集まれと？」

「三月半ばまでに参集申しつくるとの書状じゃ」

「して、^{ぐんえき}軍役は」

「百石二人役五千人の軍役にござります」

義宣の常陸の石高は二十万石として計算されている。兵五千人、役五千人とは石高動員に五千人の役夫を加えよという意味である。あわせて一万という人数である。

「一万人か、」

義宣の現在の石高は五十五万四千八百石だが、これは小田原攻め以後秀吉から与えられた朱印状に記された石高で、倍以上の土地を与えられたわけではない。検地による修正がかなりあり、その上十五万石足らずが義宣の弟達に与えられた加増である。それにしろ一万人以上の兵を動員されるのは、迷惑としか思えない。小田原以前の一族混み二十五万石として兵役を計算してくれたのは石田三成であった。それにしても兵五千、役夫五千の一万人となる。石田の好意に、何か感謝の意を示す礼物を贈らねばなるまいと義宣はあれこれ心当たりを探っている。

弥五郎は軽く目を瞑った。此度ばかりは余程の収益が見込めなければ、軍勢の士気も挙がるまい。戦による収益は、今や日本の土地領国ではなくなった。日本全国が秀吉の物になってしまったから、残るは唐土での略奪による金品しかない。それとも唐の土地でも分け与えようというのか。言葉も習俗も全てが異なる住人の耕す土地など、治めようもあるまい。そう考える弥五郎は冷静な方である。朝鮮の土地を本気で我がものにと考えた大名達もいた。加藤、福島、立花らである。秀吉は明国のことしか頭にない。朝鮮は既に自分のものになっている。

「いま一杯、飲むが良からう。^{ぶえん うお}無塩の魚も取り寄せたでな」

無塩の魚とは今風に言えば刺身ということになるろうか。塩漬けや醤油漬けにしてなければ、焼き物でも煮物でも取り敢えずは無塩なのだが、義宣クラスの者が無塩と口にするからには刺身であり、川魚は別として、常陸の水戸で海の魚の刺身を口にするとはどのように贅沢なことかを、読者諸氏に考えて頂こう。水戸で海の魚を手に入れたらすれば、漁場は那珂湊あたりになるろうか。漁師から魚を買って後は馬を走らせる。さて、どのくらいの時間がかかるものであろう。真冬ならともかく、春ともなれば急がねばならない。氷が有ったとして、使う手だてが難しい。とにかく刺身は食べた、義宣クラスの大名ならば。

「遠慮無く頂戴仕る…旨い、旨うござる」

義重も居並ぶ家老重役連に声を掛けた。

「そち達もここに来ぬか、参れよ、杯をつかわすでな」

しかしこの連中は既に不満である。酒のことはまあいいとして、唐入りのことを多寡が小姓如きに、自分より先に談ずるとは何事かというわけである。弥五郎や梅津兄弟が自分らを差し置いて、国を挙げての大事を談じていることが不満であった。

小田原の陣から奥羽検地まで、秀吉軍に参加して、常陸五十四万五千八百石の朱印状を与えられたところまでは、実のところ父義重の働きであった。その時の実働軍も重役連の手勢が主力であった。義宣が朱印状の御礼言上に京都へ上っている間に、義重が水戸城を落していた。だが、それが義重の力の限界でもあった。子供だとばかり思っていた小姓達が、立派に義宣の相談相手になっている。唐入りなんぞという、法螺とも冗談とも分からぬ話の対策など、儂にはどういできぬわい、と義重は考えている。義宣子飼いの手勢も、まだまだ数は足りないが、揃ってきている。義宣の事実上の初陣が唐入りとはいささか気になるが、外国軍との戦いも決して無駄にはなるまい。昔、元寇の例もあることだし、何より太閤殿下が総指揮を執られるのだから、まず間違いは有るまい。

「集まるのは、やはり博多辺りかの」

義宣は京・大坂より西に旅したことはない。それは弥五郎とても同じ事だ。

「博多を中心に名護屋、唐津、呼子など周辺の土地に…ということでござります。行ったことが御座りませぬ故、見当も付きませぬが何とかありませんよう」

「のんびり正月を楽しんでいるわけにも行かぬか」

一万人からの人数に動員を命じ、その上留守の用意まで手配りをしなければならない。旧暦三月ともなれば、農民たちはそろそろ田植えの用意に腰が落ち着かなくなる。これまでならこの時期に大がかりな戦など、できもしないことだし、雑兵としての農民もおいそれと動員に従うわけがなかった。それが三月に九州に集合して唐入りと来た。余裕をみて一月はかかる旅程であろう。三月着陣としても二月早々には出立せねばならない。それもこれも秀吉の実施した石高・身分制が可能にしたことである。嫌な予感が当たったというところである。

「唐の軍勢はどのような戦支度をしているのでしょうかなあ」

頭を傾げながら弥五郎が呟いた。

「太閤殿下は特別のお沙汰を下されなかった。何時も通りの支度でよかろう」

しかし義宣の表情も冴えなかった。不安とも懸念とも付かぬ陰が、顔に薄い膜のように貼り付いている。

第六章

義宣の懸念は、秀吉の動員令を受けた大名達に共通したものであった。この動員令を免れた徳川家康は例外である。小田原攻めの後、秀吉は家康に相模小田原領を含む武蔵の国に国替えを命じた。小牧長久手の戦に事実上負けたことの嫌がらせである。家康はこの新領国の整備を理由に、名護屋での後詰めまでは引き受けたが、唐入りは断った。家康の勢力温存策と分かっているが、無理強いはできない秀吉であった。虚々実々の駆け引きが、この辺りから始まっている。

義宣は一万人の軍勢を伴って名護屋に到着した。畿内近辺の大名は堺、大坂、神戸あたりから船で壱岐、対馬まで運ばれていた。佐竹軍は下関から船に乗せられ、名護屋まで運ばれた。この辺りは軍船が何百隻と浮かび、交替で上陸して身体を休めていた。その指揮は無論、石田三成が執っていたが、第一陣と共に出撃して現在は毛利輝元が、出陣の世話を取り仕切り、いなばさだみち稲葉貞通がその補佐をしていた。近畿以西の大名は百石当たり三人とか四人、九州では五人等という言わば総動員令であった。秀吉はこの動員によって、自分の天下統一の実を試したともいえよう。小田原攻めでは納得できないところがあったのであろうか。同時に領地拡大を望んでいる大名達の欲望も満たそうという、当面する最大の政治目的の遂行であったのはもちろんのことである。

佐竹軍が名護屋沖に着いたのは文禄元年(1597)四月三十日、五十隻の船に分乗していたが、二日ふないくさで全船揃ったのは、さすがに慣れた水軍の操船技術よと義宣は感心した。佐竹軍にはいくさぶね船戦の経験が無く、従っていくさぶね戦舟も持っていない。もちろん船を動かせる船員もいない。全てを心得た上での三成の作戦であった。

到着早々、輝元が義宣の陣を訪問に来た。

「遠路はるばる御苦勞に御座った。未だ姿の見えぬごじん御仁もおいでだが、やがてお見えであろう。何しろ二十万人を越える軍勢ゆえ、始末におえぬわ。殿下は名護屋まで出陣におわす。四月二十二日に出陣せよとの御命令にござった。後はどういうおつもりか分からぬが、それまでぐんびょう軍兵を休めねばならぬ。なにせ軍勢が多数でな。お休みに出掛けるのも、代わる代わるにお願い致す。順番は使いの者の言葉にしたがって下され」

町に出掛けて酒を飲んだり、女に戯れたりすることについての、それとない忠告だと弥五郎が耳許で囁く。

「二十万人にござるか。それではあの見える限りの船の数でも足りぬのでは...」

義宣が聞くと、

「とてとても...見えるだけの船数では足り申さぬ。この島影にも、あちこちの島影や湊にもこの数十倍の船が出陣を待っており申す。長崎からも小倉からも出陣いたす」

輝元はからからと笑った。

「四月二十二日に、はや出陣でござったか。我等の出陣はいつ頃でござろうか…」

「いやいや、佐竹殿は到着早々ゆえ暫くは休まれよ。今月の二十二日には、^{そうどの}宗殿が先陣として、小西殿と共に全軍の案内役としての出陣じゃった。我等第七軍は、置いてけぼりじゃよ。だがそろそろ出陣の順番であろう。佐竹殿はさていかならうかの。何しろ大軍じゃ。一気に出陣などとてもとても。それに潮の流れと風向きにもよるでな」

二十万人の軍勢を、一つの港から一度に出撃させることなど、二十一世紀の現在でも不可能であろう。当然別の幾つかの港から、何回にも別れて出陣する。対馬沖で幾つかの船団と合流して、目指すは朝鮮の釜山浦だと輝元は付け加えた。

義宣にとっては、上陸地がどこか、などということも聞いても分からない。敵の様子、例えば人数、武器の種類、鉄砲の有無、何よりも釜山浦なる港が砦になっているのかどうか、そのあたりが差し当たっての心配事である。何しろ常陸から下関まで徒歩で行軍してきた軍勢が、おいそれと強敵に立ち向かえとは思えない。

五千人の面倒をみるのは、並大抵の苦労ではない。上士は何とか農家あたりに寝泊まりできるが、大部分の兵士は野宿である。小人数に分けて監督しないと、近くの村に女漁りに出掛けるだろう。城下町に泊まるときに、適当な銭をくれて、欲望を発散させてやらねばならない。銭は義宣の懐から出て行く。

兵糧は、秀吉や三成その他の側近の蔵入米が利用できて、用意した自前の米穀等を使うことは、予想より少なかったが、それでも場合によっては買い足さねばならないことも有った。この代金も義宣の負担である。米を炊く薪も買わねばならない。一一拾い集めていては間に合わない。この雑用や炊事用の人数にも一定の費用がかかる。

さらに、朝飯後の廁の使用方を整えねばならない。もし無ければ、簡易トイレを作らねばならない。その辺に野糞を垂れ流すわけにはいかない。小田原の陣の時に用意した炊事用の竈や廁をそのままにせよとの秀吉の令達がこの際役に立った。これが軍令による兵士以外の五千人加算の意味である。戦をする前にかかなりの経済的損害を蒙っているのだ。

「殿下のお言葉によると、釜山にはもう敵はおらんそうじゃ。どうも敵方は仲間割れをしておるようで、殿下はそれを御承知でこの度の唐入りを計られたようじゃ。」

輝元に言われなくても、そのあたりの雰囲気は義宣にも分かっていた。

天正十八年(1590)に我が国に派遣された朝鮮通信使の正使は^{こういんきつ}黄允吉であった。秀吉は黄に、自分が日本の天下を統一したことを知らせた。自分こそこの国の支配者である、全てのことは自分が決定し、執り行うので左様心得よとでも言い渡したのであろう。

通信使としては、言葉も充分には通ぜず、故国で聞いてきた様子とは少なからず日本の国情が異なるので戸惑った。通信使は毎年来日するわけではなかった。

そもそも日本などという国は、朝鮮の属国のようにしか考えていない。朝鮮は明国の属国である。日本も又明国の、それも自国より格下の属国であろう。話が素直に通じるわけが無かった。

「天下を平定した以上、儂は明国を攻め落とそうと思っておる。その支度もしておる。朝鮮は我等の軍勢を明国まで案内し、かつ我等が軍勢に加わり明国を攻めよ。お主ら帰国したら李王殿にその旨よく伝えておけ。わが命に従えば、勝利の後、幾許いくばくかの領地を与えるが、反抗するなら首を頂くと。帰りがけによく見ておくことだな。朝鮮攻めの用意が各地でみっしりと行われているところをな。」

この言葉も十分に伝わったかどうか。副使の金誠一きんせいいつも同じ言葉を聞き、同じ秀吉軍の戦準備いくさじゅんびを目にしている。だが兩名の李王への報告は正反対の内容だった。正使黄は

「倭国は我が国に戦を仕掛けようと準備しております。我が国もすぐに準備致さねば、間もなく大軍で攻めて参りましょう」

副使金は

「倭国には我が国を攻める気など毛頭御座いません。そのような力など、あのような弱小国に有るわけが御座いません。黄殿は倭国内の小競り合いの様子を、大袈裟に申し上げているに過ぎません」

不幸なことに、この時期、李王朝は激烈な派閥争いの渦中であつた。その上賄賂による獵官も当然のこのように横行していた。要するに政権の体をなしていなかった。正副使兩人ともに、この腐敗状態の外にいるはずがない。御兩人は対立する派閥に属していた。さらに不幸なことに金の「倭国戦わず」という報告が王朝に採用されてしまった。朝鮮国は倭国などちよいとされた貿易相手の弱小野蛮国くらいにしか意識していない。倭国が朝鮮に戦を仕掛けるなど、これっぽっちも思いつかなかつた。対する秀吉は戦国時代の苛烈な戦を何度も経験して、戦国武将の頂点に到達した男である。配下の部将に与える領地を求めて明国・朝鮮を攻めようと、小田原攻め以前から計画調査していた。

日本から言えば文禄の役、朝鮮からいえば壬辰の倭乱の当初の戦果は、この意識の差から来たと言えよう。そもそも倭乱の乱という語は内乱を意味する。

倭は朝鮮王朝の領土の一部で、その一地方が反乱を起こしたという意識である。そう思われても仕方がない事情が無いこともない。足利義満が自ら望んで、当時の中国から日本国王の称号を与えられ、悦に入っていたという記録が残っている。

明国にしてみれば正当な倭国の支配者は足利幕府であり、秀吉は反逆の臣である。そういう文書しか明国には伝えられていない。王とは属国の首長に与えられる称号なのである。

秀吉も、その家臣の中にも、足利幕府のそんな経緯いきさつを知る者はいなかつたろうし、いても、これっぽっちも気になぞしなかつたろう。

第七章

輝元が九州に居たとはいえ、宗義智、小西行長、松浦鎮信、有馬晴信、大村喜前、五嶋純元の一万八千七百人の第一軍は四月十一日に対馬大浦を七百隻余りの兵船で出撃し、翌十二日に上陸した。この七百隻という船舶数は、安宅舟、関舟、小早船を交えたいわば連合艦隊だ。

対馬と釜山との距離は五十三キロそこそこである。晴れた日には対馬から釜山が見える。朝早く船出して全力で航行すれば、夕刻までに釜山浦沖に到着する。速度は戦艦級の安宅舟あたけぶねに合わせるから遅い。だが、夜間の航行、上陸、戦闘は未知の土地では危険すぎる。一晚の余裕をもって上陸し戦闘開始という段取り通りの戦であった。

釜山城を守っていたのは、鄭撥ていはつを將とする李朝軍であったが、降伏すれば命だけは助けるという降伏要求に従わず、鄭撥は首を刎ねられ、以下の兵は城外に追い出された。加藤清正、鍋島直茂達、第二軍二万二千八百人の將兵も第一軍に続いて出撃、以下第九軍の羽柴秀勝、細川忠興まで総勢十五万八千八百人の大軍が唐入りをした。その他後詰め軍として徳川家康始め、東国中心の將兵が十万一千四百人、水軍が九千五百人合わせて二十七万人に及ぶ大動員である。

輝元ももちろん第七軍毛利勢三万人の総大将として渡海することになる。三万人と一口にいても、一度に出撃出来る人数ではないことは前述の通りである。義宣も軍勢を分割して渡海に備えなくてはならなかった。この作戦に使われた船舶は二千隻を超えたと思われる。

釜山浦に攻め込んだ秀吉軍の第一軍が、巨齊島きよさいとうと釜山浦の城を攻撃した。当然のことながら城は有った。だが両所とも、抵抗はほとんど無かった。

戦は無いと王朝からの令達である。令達が、倭国と和親条約でも結んだか、あるいは倭国が降伏したのか、一切内容不明の令達である。三時間足らずで武器、防具、兵糧、馬匹を略奪されたうえで、城主は首を刎ねられ、下級兵士は城外に追放された。

追放された將軍や城兵達を、農具や棒で叩いたり突いたりしたのは、釜山の民衆であった。それ程に李王朝の腐敗と圧政は酷いものであった。組織的、系統的に抵抗戦が練られていたら、こう簡単に釜山が落城することはなかったであろう。

三成は略奪した兵糧を民衆に配るよう軍令を通達していた。結果は明らかだった。秀吉軍に抵抗する民衆はいなかった。軍隊から食べ物を与えられた経験など皆無の民衆だった。

中には秀吉軍に参加を希望する者もいた。三成の狙いが的中した。地理不案内の秀吉軍にとって、現地出身の案内人は是非とも必要だったのだ。

第八章

名護屋の佐竹勢の近くに大谷吉継の留守部隊が屯^{たむろ}していた。大なり小なり各大名は留守部隊を名護屋に残していた。大谷留守部隊のなかに村山宗兵衛という侍大将がいた。とはいえ本隊自体が小人数である。村山が率いる手勢も五十人前後の小勢であるのは致し方のないところだが、なかなか手強そうな連中である。暇に任せて弥五郎は大谷勢の連中達と行き来するようになり、なかでも村山宗兵衛とは酒を酌み交わすようになっていた。

「海の向こうまで出掛けて行ってまで、戦をするのは好かん。この戦が終わったら、儂は武士を止めようと思っとる。」

宗兵衛のうんざりしたような口振りに、弥五郎も心の片隅で同調していた。

伊達や北条を相手の小競り合いとは、戦の概念が全く異なっていた。一万の大軍を九州まで移動させること自体、すでに戦であった。

「殿、軍兵の食事には気を配りなさいませ。名護屋とやらに到着するまでは、日に三度、粥の固炊きに致しなされ。梅干しなり、漬け物なりをそえれば、一層喜ばれましょう。飯^{いい}は戦になってから日に二度にされれば、手間も省けましょう」

義宣の妻の忠告である。粥の固炊きとは我々が毎日食べている、水から炊きあげる飯のこと、飯とは蒸した米のことである。

当時の大名というものの暮らしは、我々が思うほど贅沢でもなければ、形式ばったものでもなかった。食事も日に二度から三度へと変わりつつあった。

その食事で米が毎日食えるか食えないか、菜^{さい}に漬け物と干し魚があるかどうか、その他の煮物焼き物は有ったり無かったりくらいが大名と下々の者との違いで、大名でも、毎日汁物が出るわけではない。白湯^{さゆ}を飲む方が普通であった。

現代の我々から見れば、極めて粗末な食事だが、それがこの時代の常識的な食事であった。信長ではないが、「…人間五十年…」も、この栄養状態ではやむを得なかったであろう。V章で述べた無塩の魚がどれ程の贅沢品かお分かりのことだろう。

義宣率いる常陸勢は、後詰めとして名護屋に滞在することになった。戦に駆けつけたものに、滞在は無いだらうと読者兄弟はお思いだろうが、陣構えと言えるようなものではなかった。もっとも加藤清正は半月そこそこで城を作ったといわれる。唐津城祉がその名残と言われるが、さて如何なものか。秀吉とその取り巻き連中を収容できるほどの規模のものであろう。

十万を超える武装した人馬を、常時収容可能な城など有り得ない。残りの軍勢の大部分は、前述したように、取り敢えず食事の支度、厠、洗濯、俗に衣食住と呼ばれているものの極々簡易なものが必要とされる。それにしても板が、瓦が、敷物が、兵糧がとそれだけで莫大な費用が消えていく。だがそれだけの費用で済むと思ったら大間違いである。

人生とは、退屈しのぎの別名だと喝破したのは誰だったか、要するに、十五万人以上の血気盛んな強者つわもの共に、二日や三日ならいざ知らず、月単位、年単位で同じ場所で何もせずにじっとしている、とは言えないし、言われて出来ることでもない。

攻める相手の朝鮮から九州を攻撃する気配は微塵もない。とすれば、名護屋に市や宿場が出現せざるを得ない。余談だが名護屋はのちの唐津である。唐という字に注意されたい。

第九章

ところで、攻め込んだ味方が進撃する速度の早いこと早いこと。戦国時代の苛烈な戦を、身を以て経験した連中にとっては、とてもものに信じられない戦況報告であった。

中には気になる報告も有った。唐入り勢を運んだ船が、朝鮮の水軍に攻撃され、相当の損害を受けたとの知らせである。上陸した後のからぶね空舟を狙われた。

秀吉にはイ・スンシン李舜臣という朝鮮西岸部水軍の提督の名が伝えられていなかった。では、当時の朝鮮の人々がその名を知っていたかということ、そんな事は有るまい。

今でこそこの名前は、倭軍を打ち負かした英雄として朝鮮全土に知られた存在になっているが、当時この提督の名前を知っていた庶民は殆どいなかったのではあるまいか。

とにかく大筒を使う朝鮮の水軍に、百隻近い船が沈められたという報告である。始めのうちは何かの間違いだらうと、報告を信じる者は少なかったが、やがてそれが真実のことであり、残りの船も朝鮮の水軍の攻撃を避けて逃げ回っている実情が分かってきた。

「進み方が早過ぎたようでございますな」

弥五郎は首を傾げた。

「城はどんどん落ちているのに、船戦は逆のようじゃな。どうなっているのやら、儂にはほとんど分からん」

船に大筒を積みそれを発射して焼き討ちを仕掛けてくるという。味方の船の速力が相手より勝っているため、かろうじて逃げる事が出来ているが、どう戦えばいいか思案中だとの知らせである。

軍監の三成からは、加藤らの進撃速度が早すぎて、補給が間に合わない、何とかしないと、兵糧も弾丸も使い切ってしまうそうだ、おまけに朝鮮の民家には徴発できるほどの食料を持っている家が少ない。略奪もできないほど彼の国の民は貧しい。何とか殿下のお力で進軍の速度を落として頂けないかと、嘆願に近い報告が届いている。

秀吉は一日でも早く明国に攻め込めればそれが何よりも、三成の報告など全く気に掛けようと思わない。

この頃になると、関東から東の国の兵は渡海せずに、後詰めと役割が決められ、義宣もほっと一息、それも密かに安堵の溜息を吐いていた。

第九軍が渡海するまでは、遅く出陣する大名達が世話役を命ぜられていたが、攻撃隊と後詰め隊がはっきりしたところで、連絡役が秀吉の小姓達に割り振られた。それら小姓の数十名が馬をとばして各大名の仮陣屋の間を回っている姿が目につくようになった。

それにしても、四月十二日に釜山ノアムに上陸した小西行長は、加藤清正との約束を無視して勝手に兵を進め、後から来た加藤に違約を責められた。そこで両者は違う道を漢城（現ソウル）まで進むことにした。結局行長の方が先に、僅か二十日間で、五月二日には到着している。どの道を進んだのかはほぼ分かっているが、細部に至るまでは定かでない。

が、いずれの道を選んでも、四百四、五十キロは有ったと思われる。日本の国内でもこのスピードでは移動できないだろう。

考えられるのは、李朝軍の主力が騎馬隊であり、その騎馬を捕獲利用したことである。日本には無い馬車も活用できたと思われる。それにしても朝鮮も難路の多い土地柄である。この進撃速度は驚異的だ。

平壤ピョンヤンには六月十六日に入った。距離の割に日数が掛かっているのは、山川などの特に多い難路だったからである。

こういう情報が入ってくるのは、留守部隊への知らせの又聞きか又又聞きで、秀吉からの公式戦況説明等は一切行われぬ。秀吉の小姓達は時々義宣のもとに来て、勝ち戦の知らせをもたらす。水軍の負け戦のことなどこれっぽっちも話さない。

朝鮮の水軍が、倭国の水軍より場慣れしていたのは事実であった。なにしろ倭寇わこうが朝鮮沿岸を荒らし回ったのは、つい二十年ほど前である。いや秀吉の世になっても、こっそり略奪船を対馬海峡に出して、荒稼ぎをしていた連中がいたかもしれない。秀吉は禁令を出していたから、大名連中なりわいで倭寇を働く者はいなかったであろうが、それを生業としていた者が、おいそれと手慣れた仕事を止める筈がない。

倭寇の戦術は目的の船に乗り込み、積荷はもちろん、船そのものも乗っ取ってしまう手口である。始めのうちは倭船であろうが唐船であろうが、見境無く襲っていたのが、大名の持ち舟が武装するようになってからは、朝鮮南西部の沿岸部まで出掛けるようになった。その対策に朝鮮側が工夫を凝らすのは、理の当然というべきだろう。

朝鮮側は倭船が近づくのを待って大筒を放った。大筒といっても、重くて丸い弾丸を撃ち出すものではない。そうなるまでには、まだかなりの時間が掛かる。それほどの火薬の威力はまだ無い。大筒の弾丸は小粒鉛の散弾と石くれと火矢である。これを食らった和船は兵士を撃たれた上に船を焼かれ、横腹に穴を開けられた。彼等は船を奪おうとはしなかったのである。そのところが秀吉の水軍には理解できなかったのだ。なんのことはない。秀吉水軍は倭寇と殆ど変わりがなかったのだ。

第十章

幸いといっていいのかどうか、倭船の板や柱は杉、檜など軽い材料が使われていた。朝鮮の船は松、樫など丈夫だが重い材料でできていた。おまけに、櫂の数も漕ぎ手の数も圧倒的に倭船の方が多かった。そこに驕りと油断があった。

始め倭国の水軍と戦ったのは李舜臣だった。舜臣の率いてきた水軍が百隻余りの倭の水軍を沈めた。だが舜臣はその手柄にもかかわらず水軍の司令官を罷免される。代わりの司令官は元均であった。この交替は無いだらうと思うのが常識だが、李王朝内の派閥争いが此処まで影響した。

舜臣も中央の命令を無視し、違反を繰り返した。競争相手に足を引っ張られても仕方のない状況だった。舜臣の戦果を妬む者達が彼を引きずり下ろした。だが元均の率いる水軍は、大筒の打ち方も知らない、兵とは呼べない者達であった。

お陰で倭の水軍は一息入れる余裕ができた。火縄銃の一斉射撃によって ^{ふなばた}船端に群れている朝鮮の船員を死傷させる戦法を考案し実行できた。結果元均の水軍は全滅に近い損害を受けた。元均自身もこの戦闘の中で戦死する。

成り行きとして舜臣が司令官にならざるを得ない。元均に換わって李舜臣が水軍を指揮するようになると、戦況はがらりと変わった。彼の指揮する水軍は倭国の水軍の戦法を知り尽くしていた。倭国の船は朝鮮の船に接近し、乗っ取りを目的としている。近づくのを待って大筒を発射し焼き討ちにする。この繰り返しの間は、圧倒的に朝鮮水軍が有利であった。そもそも倭国軍は海戦を想定していなかった。そのため七月七日の閑山島海戦までに大半の船を沈められてしまった。

以後倭国は船だけの海戦は仕掛けず、水陸両用作戦に切り替える。倭国、朝鮮両国共に平底の船で、長い航海はできず、陸上からの補給を絶えず必要とした。接近戦の不利を覚った倭国軍が、陸上からも朝鮮水軍を攻撃するようになってから、ようやく倭国の船の損害が少なくなった。

一口に言えば陸戦では倭国の大勝、海戦では朝鮮の圧勝と言えよう。

さらに当時の朝鮮の国情が非道かった。先ずは良民と賤民に二分され、賤民のなかには売買の対象となる奴婢が存在する。二分された身分制度の内容も、名称、職業が幾つも有り、千差万別そのもので、悪名高いインドのカースト制度と似たようなものだったらしい。

加えて東人派と西人派なる二大派閥が有り、全ての要人がこのどちらかに属し、あろう事か、その派閥自身が小派閥を作って対立し、それぞれに官職を餌に賄賂を取りまくるといふ、まあズブズブ、ドロドロの状態であった。兵はいても、一度も訓練を受けたことのない者が殆どだったといふから、倭国軍が陸戦で勝ったといつても、あまり自慢の種にはならない戦だった。

政府軍はそんな状況だったが、さすがにプライドの高いお国柄、義軍と称する民兵組織が作られ、倭国軍の補給部隊を襲ったりした。一方賤民として蔑まれ、二重三重の搾取と圧政に虐げられてきた朝鮮民衆の中には、倭国軍に同調する者達も存在したらしい。

漢城の王宮に火を放ち略奪したのは彼等民衆だった。^{しょうれいいん}掌隸院^{ぬひ}という奴婢を管理する役所も当然のこととして焼き討ちされ、管理書類が燃やされることで奴婢は完全に解放された。

こうなると解放者は秀吉ということになる。秀吉が彼等に或る程度歓迎されたといふのも、自然な成り行きであろう。小西勢も加藤勢も朝鮮民衆の慰撫に懸命であった。

倭軍が平壤に達したとき、九軍の將が集まり朝鮮八道の分割統治を相談、決定した。李朝軍はといふと、半島の北端迄追い詰められ、明に助けを乞うた。明国としてもすぐ隣まで倭国に攻め込まれ、オランカイにまで攻撃を仕掛けられては黙ってられない。

オランカイとは女真族の勢力下にある地方（満州）で、女真族はやがて明国を滅ぼし、清国を建てることになるが、この時点でも加藤清正の軍は押し返され、清正から秀吉にオランカイ地方から明国に入るのは不可能と報告が届いている。相当に精強な兵力を保持していたと思われる。

その間、補給路の延びきった倭国軍は、食料を中心に冬期の燃料や衣服、寝具まで略奪せざるを得ない。そこまでの物の用意は考えてもいなかった。秀吉、三成はじめ朝鮮攻めに乗り気だった大名連中にとつても想定外の事態である。

第十一章

朝鮮の冬は寒く、折からの飢饉で、奪おうにもろくな食料が無く、補給隊は義軍や農民一揆に襲われる。ところへ明国の名将李如松率いる四万の大軍が朝鮮軍の支援に国境を越えて攻め掛かってきた。

明軍の火砲の性能も数量も秀吉軍をはるかに越えていた。大音響とともに散弾が放たれる。何十人という死傷者が一発の大筒で倒れるとあっては、どうてい持ちこたえられない。たちまち、占領した城も新たに築いた砦も明・朝鮮連合軍に攻め落とされ、後退に次ぐ後退で倭国軍の士気も衰えがちになり、逆に明・朝鮮軍は勢いづいた。

平壤まで攻め込まれたところで、倭国軍は漸く踏みとどまり反撃を開始した。立花宗茂を先陣とした倭国軍がじりじりと敵を北へ押し戻し、碧蹄館まで達したところで明・朝鮮軍との決戦を決意した。

立花宗茂、小早川隆景、小早川^{ひでかね}秀包吉川広家の先鋒。本隊は黒田長政、石田三成、加藤光泰、宇喜多秀家、この編成で、明・朝鮮軍の予定進路の後背部から猛攻撃を加え碧蹄館の遙か北まで追い散らした。

さすがの李如松もこの敗戦で戦意を失ったといわれる。彼にとっては、それほどに非道い負け戦であった。

勝ったとは言え、倭国軍にとってもこれが限界という、必死の戦であった。軍を碧蹄館まで引き、講和交渉を始めた。やがて講和が成立して倭国軍は引きあげることになる。

この講和が陸戦の中、特に李如松を相手に行われたことを忘れてはならない。朝鮮の李王朝がどんな有様だったか思い出して欲しい。

陸戦での講和など水軍にまともに伝わるわけがない。特に兵力を殆ど持たない補給船が李舜臣の水軍に狙われ、陸戦の兵士を乗せる船の数が不足し、帰国を争う倭国大名達が乗船順をくじ引きして決めた。倭国軍もへとへとだった。^{はため}傍目や評判など気にしている余裕など無かったのである。

石田三成の軍勢の中に大谷吉継率いる千人の兵力が加わっていた。吉継は三成と昵懇の間で、三成はハンセン病を患う吉継のために、唐入り免除を考えていたのだが、吉継は聞き入れず、選りすぐりの千人を率いて参戦した。その侍大将の中に村山聡兵衛と懇意な山野平助という者がいた。侍大将といってもたかだか五十人程度の長である。五十人といっても強者揃いである。

吉継は敦賀五万石の領主としては応分の人数を派遣していた。三成の傍にいて、軍監の補佐役をしている。戦略家として図抜けた才能を持っていた。平壤での迎撃戦を三成に進言したのも吉継であった。

彼の部下の一人が、妙な物を持ち込んできた。鉛のような見かけをした、直径二、三寸程の丸くごつごつした、厚みが平均五分くらいの金属塊である。

「どうした、平助。そりゃあなんだ」

顔に掛けた白布の陰から吉継が指さした。

「はあ、近くの鉱山に行きましたところ、このようなものを作っておりました。銀を掘る山でござりますが、銀を吹く前にこのような物を作ります。これを高温で熱しますと、鉛が溶け落ちて金、銀が残ります。その量が、我が国の山のものとは比べものにならないほど多いので、何かの足しにならぬかと、吹き方を聞き出し、実地に試して参りました」

「そちは確か山野と申したな。」

「おそれいます。山野平助にござります」

「そちは鉱山のことに詳しいのか」

「はあ、こちらに仕官する前に、石見^{いわみ}銀山で、村山宗兵衛殿と共に働いておりました」

吉継は金属塊を手にとって、重みを計ったり裏表の様子を調べたりした。その様子を傍から三成がじっと眺めている。

「わが敦賀の国には生憎と銀を産する山など無いのう。それより王宮にはなかなかの焼き物が有るというではないか。それらを手に入れた者はおらぬかの。」

「はあ、それらのものは島津様、有田様、黒田様などが焼き手もろとも手に入れられ、すでにそれぞれのお国に送られたとか」

吉継主従のやりとりを聞いていた三成が

「山野とやら、お主はその鉛に似た塊をどれほど手に入れたのかの」

平助は総司令官クラスの三成から声を掛けられ

「へへっ」

と平伏し

「五個ほど持って参りました」

吉継が手にしていた金属塊を我が手に移した三成は

「大谷殿、この板を一個儂に呉れぬか。」

「宜しければどうぞお持ち下され」

「山野とやら、良いな」

と断ったのは、戦場における分捕り品は、その個人の物という不文律が有ったからで、主人吉継のものかどうか、この場合は難しいものがあつた。

「もちろん、私は宜しゅう御座いますが…」

と吉継の顔色を伺っている。吉継は大きく頷いてみせた。

三成は丸い金属の塊を掌で弄びながら、

「この物の名は何と申すのじゃ」

「はっ、言葉ではちと難しゅうござるが…」

と懐から紙を取り出した。その紙には

貴鉛と書かれていた。

「こちらの^{やま}鉾山にも漢字の読み書きができる者がおり、その者に書かせましたところ、このように書き申してござる」

「ほう？、きえん、とでも読むのかのう」

三成はその金属塊を領袖の大名達のところへ持ち込んで何か話した。やがて三成が山野を掌でおいでおいでをして呼んだ。吉継でなく下輩の山野を直々に呼ぶのは、いくら戦場とはいえ異例のことである。

この場で平助は貴鉛のことについて大名達から色々と聞かれた。聞かれたことには何でも答えて来いと吉継に言われていた平助は、貴鉛を灰の中で解かすと、鉛が溶け出し、金銀が残ることを説明した。

「では、何故金銀にして持って来なんだのじゃ」

聞いたのは黒田長政である。

「そういたしますと、目立ちまして狙われます。鉛ならば狙われることも有りませぬゆえに」

第十二章

釜山に引き揚げる停戦会談は、実質、三成と李如松との間で取り決められたので、李朝軍の中には、講和成立を知らない者もいた。まして義軍や一揆軍が知る筈はなかったが、明、倭両軍が引き揚げるのを見て大方は了解した。だが中には倭軍敗走と間違えて、略奪や盗みに来る者もいた。平助が警戒したのはそういう輩だった。聞いていた大名達も多少とも経験したことなので、失笑しつつ納得した。

かくして文禄の役は休戦期に入った。

休戦であるから、戦闘がいつ再開されるか分からない。釜山とその周辺の城砦には然るべき軍兵が配置され、残留している。そこに交替要員、補給品を送る軍団や商人が、名護屋に未だ控えている。秀吉は大阪城に帰っていた。日本の主戦力が各地方に帰国を始めたのが文禄二年(1593)四月十八日であるから、丸々一年をかけた戦であった。

だが秀吉は満足であった。いずれ朝鮮の南半分は我が物となり、明国皇帝の娘が天皇の後になる。つまりは、秀吉軍に明国が実質上降伏した、との使者が来るはずである。然しそんな使者が来るはずは万に一つも無いことを、秀吉ともあろう天下人が気付かなかったのだから、生育環境が、彼の政治感覚、特に外交面において決定的に不利な方向に作用していたと言えるだろう。

もともこの戦争は、朝鮮に対し、明国征服に当たっての道案内を命じた事が原因で始まったものだ。朝鮮が対馬領主のそうよししげ宗義調の支配領だとの、秀吉の思い込みが原因である。秀吉は対馬に出掛けたことはない。実見していれば、宗氏が朝鮮の強い影響下に有ることが実感できたであろう。

事実、宗氏は朝鮮から毎年歳賜米と称する給料を与えられていたから、朝鮮にとっては臣下以上の存在ではなかった。その宗氏が明国征服の道案内を命ずることなどできるはずがない。

天正十八年(1590)の通信使は秀吉にとって入貢の使者であった。よって自国内の軍備を彼等に見聞させたのである。従って文禄の役における朝鮮の抵抗は、僅かのものであっても、秀吉には不本意であった。この意識は明国相手の交渉においても秀吉の頭から抜けていない。

そのはずである。彼は交渉を行っている家臣、小西行長、石田三成らから詐欺に掛けられていたのだから。

秀吉の要求は前述二項を中心とした七項目である。明国が飲めるはずもない要求だから、本来なら交渉決裂になり、再度開戦となるところだ。だが小西行長、石田三成は戦線維持が難しい現実を痛感していた。講和最優先である。

相手側の明国側交渉役、沈惟敬にも事情があった。女真族の進入である。彼も早く講和を成立させ帰国して防衛戦に当たれとの令達が届いている。女真族はこれより二十年後に後金国(満州国)を建国するであろう。明にとっては早期解決を図らねばならない重要案件である。

秀吉には明が降伏したとの報告がなされ、明の皇帝には倭国が降伏したと報告された。かくて両者とも勝利したとの、インチキ講和条約を本国に持ち帰ることになった。秀吉も明国皇帝も、このインチキに気が付かなかった。まあ足かけ四年もかけて、双方知恵を絞った挙げ句の結果できあがったペテン条約である。いずれ破綻せずにはいない代物だが、取り敢えずは両軍痛み分けて、ホット一息というところが精一杯の効果だが、それでも無いより益しの効果であった。

この長い講和交渉の期間、大部分の大名は領国に帰っていた。多分これで太閤殿下も気が済んだであろう。もはや二度と明国征伐になどに、手を出す気などおなりになるまい。それが多くの大名の思惑だった。義宣も常陸に帰国して、やれやれと一息ついていた。

破綻は慶長元年(1596)、明国の使者に朝鮮通信使が加わった一行が、大阪城の秀吉のもとに向かった時に起こった。秀吉は無論明国が七箇条の条件を受諾した上での、入貢の使者であると信じて疑わない。九月一日、秀吉は上機嫌でこの使者と謁見した。

ところがなんと明国皇帝からの文書に

「汝を封じて日本国王と為す」

と書いてあるではないか。秀吉、怒るまいことか。日本を属国と見て、その属国の首長にしてやるとの文面である。秀吉としての面目は丸潰れだ。明国の属国になった覚えなど、これっぽっちもない。その場で再出兵が決まった。慶長の役の始まりである。

この度は西国、四国、九州方面の大名勢を中心に動員令が下された。文禄の役とは戦の意味が大違いである。本来日本に属していたはずの朝鮮が、秀吉の意に反して、明への案内役をするどころか、明と組んで秀吉軍に反抗した。これは秀吉にとっては反逆行為だ。この反逆に対する懲罰のための出兵である。それでも出兵の準備に四、五ヶ月掛かった。

この動員は義宣には発せられなかった。

「困った戦道楽じゃのう」

溜息をつきながら、誰にともなく義宣が呟く。慶長二年(1597)二月のことである。

「殿下もお年を召され過ぎましたかな。傍^{はた}の迷惑を一向にお考えではないようじゃ」
太く低い声は憲忠のようだが、誰も咎め立てはしない。鷹狩りの途中の一服中である。使いの者が、朝鮮出兵の事と、今回は関東より東の大名は出兵の必要無しとの知らせの書面が届けられた。義宣を囲んで十人程の小姓重役が、幕を張った休みどころに集められての協議である。

「三成殿も、御苦労なことよ」

心から同情する声で、義宣は書面を弥五郎に渡した。ざっと目を通した弥五郎は書面については一言も口にせず

「さて、もう一追い致しませぬか」

狩の続行を促した。広い野中とは言え、誰が聞いているかも知れぬところで、主従揃って太閤殿下の政を非難するような危ないことは避けねばならない。差し当たっての災難は避けられたのだから、それだけでも良しとしなければなるまい、そんな弥五郎の心根が、透けて見えるような声音だった。

慶長三年(1598)十一月十八日、秀吉が没した。となるとこの戦の意味そのものが無くなる。五大老は即時朝鮮からの撤兵を決めた。ただ戦はいつの時代でも、どこの戦でも、進撃よりも撤兵の方が何倍も難しい。自軍にも秀吉の死を知らせず、徐々に戦線を後退させなければならない。仮にも敗走の気配など見せるわけにはいかない。

追撃してくる有力な朝鮮軍がいなかったことは幸運であった。かくて慶長の役は膨大な浪費を費やした末に幕を閉じた。秀吉も罪な男である。動員した大名達に、思いっきり金を使わせておいて、その代償として期待された領国の一片たりとも与えぬうちにあの世いきでは、収まりが付かない。全軍引き上げの後、秀吉の死去が発表された。兵は国に帰し、領主は京に集まれとの令達である。

「如何なりましようかなあ。難しいことになりそうでございますなあ」

弥五郎が義宣の気色を伺いながら、首をひねる。

「さてなあ。殿下が生きておいでも、今回の始末には手をお焼きになるだろうが、お亡くなりになったのでは、どうなることになるのやらのう」

面倒なことにならねば良いがと、義宣は付け加えた。

第十三章

この戦、勝ったのか負けたのかはつきりしない。陸戦を主に戦った者は勝ち戦以外の何物でもない。水軍を担当した者にはとんでもない敗戦である。いずれも日本の商人達から金を借りて戦力を整えている。本来ならば朝鮮からの戦利品でこれらの借金を返せるはずだったが、そんな儲けは一文もなく引き上げざるを得なかった。今更朝鮮の土地を与えるといっても、のこのこ出掛ける者はいるまい。秀吉の残した黄金で、出兵の費用を手当するしか方法が無い。だがその金額たるや天文学的数字になる。豊臣家の財産だけで足りるとか足りないとかの問題ではない。

戦評定の中心がこの金銭問題に集中したのも致し方のないことである。「武士は食わねど高楊枝」など気取っている場合ではない。取れる物は何でも取らねば財政が成り立たない。是非とも豊臣家から相応のものを支払って貰わねば、領国そのものが領主を信用せず、挙げ句に解体してどこかの誰かの国にされてしまうだろう。

一方豊臣家とすれば、そんな金を払う気は毛頭無い。豊臣家が幾つあっても足りないほどの金など、払いようがない。当然豊臣家代表としての軍監石田三成と、実戦部隊大名達との間には、妥協できない対立が、当初から存在した。当然戦法の巧拙まで議論に上る。陸戦で朝鮮の城の殆どを落とした加藤らは、その勝利の恩賞を当然のこととして要求した。そのために手薄になった水軍が、朝鮮水軍に痛撃を食らったことなど知らん顔である。軍監の命令を聞かずに、勢いのままに進軍した陸戦部隊の戦法、戦術は三成の批判の的になった。

勝ち戦のプライドを正面から罵倒された大名連は、怒鳴るやら喚くやら、とても会議、相談などと呼べたものではない。中には脇差しに手を掛けて、この場で三成を刺し殺そうとの構えを見せる者さえいた。

「まあまあ、お静かに願わしゅう、頭に血が上っては聞ける話も聞こえません。手柄は手柄、損は損、落ち着いてお話になれば、それぞれに御納得いただける道も御座ろう程に、取り敢えず御冷静に、御冷静にお願い仕る」

徳川家康が両者の間に、両手を拡げて割って入った。

五大老の筆頭の仲裁では、この場はともかく収めねばならない。だがこの仲裁の文言に含まれた毒に気付いたのは三成だけだったろうか。「手柄は手柄」として認めるか、認めないかが肝心要のところなのだ。それを何気なさそうな文言に流し込んで、陸戦部隊の心をくすぐくすぐっている。この男、油断ならぬ奴と三成は心に刻んだ。だがこの場はとにかく控えねばならない。

「石田殿、彼の者達に何程かを与えねば、収まりは付かぬと思われるが…」
一休みの間に、茶を一服と三成を別の間に誘い、話しかけたのは家康であった。続けて「殿下のお残しになられた物はいかほどであろうか。彼の者達に多少とも与える物が無ければ、承服致しようも無き様子じゃでなあ」

三成は腹の中でチエツと舌打ちをした。余計なところで口出しをされては、収まるものも収まらなくなる。その上、家康と会った後で補償の話を持ち出せば、家康の影響力を認めた形になる。三成としてもそろそろ妥協の潮時だと思っていたところである。此処で家康に出しゃばられては、この場での始末は付けにくくなる。

「徳川殿、貴殿は名護屋にお止まりになり、彼の地にはお入りになりませなんだ。それ故彼の地での、あの者達の戦ぶりを御覧になってはいらっしゃらぬ。いらぬ口出しは御無用に願いたい。」

「これはしたり、拙者後詰めとは言え武蔵から名護屋まで、駆けつけてござる。これも戦の一つで御座ろう。いらぬ口出しとは聞こえませぬなあ」

家康に招かれ、こうして談合したこと自体誤りであったと三成は後悔した。

こうなっては、彼の者達と一応喧嘩別れの形を取るしか有るまい。いまだ幼い秀頼様の御為に殿下のお残しなされた物に手を付けるわけにはいかぬと、家康も分別してくれようと三成は思った。その上、殿下の正式な葬儀も、殿下をお祭りする寺社も建立しなければならない。そんなことぐらい分かっているだろうに、という態度が露わに表に出た三成の態度だった。

「石田殿、停戦条約の文言を書き換えられましたな。殿下に偽の条約を御覧にいられたのでは有りませぬか」

講和条約の裏面工作まで家康が知っていようとは、三成も予想していなかった。

「御存知であったか、だからして彼の地で戦ってみなければ、実情が分からぬと申しておる」
「これはしたり、あの条約で我が国が戦に勝った、明国が降伏したと有る故に殿下は喜ばれた。だが明国からの書状はさすがに石田殿でも手を出せなかった。どうせやるなら其処までおやりにならねば、事は半端に終わらましように。石田殿と組んだ明国の沈惟敬殿は、条約の虚偽が現れて死罪に処されたそうに御座る。あのような偽書さえなければ、二度目の唐入りなど無かったでしょうに。」

家康の情報網は三成の予想を超えていた。

第十四章

戦評定とは、戦闘前なら作戦会議、戦後なら戦績評価を論ずる会議である。今回は後者であるが、勝敗がはっきりしているときには、比較的すんなりと会議が進行する。だが今回のように勝敗いずれとも決めかねる場合は、揉め事の種になりやすい。

三成は唐入り失敗論であった。確かに朝鮮の城は数え切れないほど落としたが、いずれも我が国の城の概念には遙かに及ばず、そのままでは使い物にならない。そんな城を幾つ落としても、手柄にはならないという論法であった。しかも水軍の損失は思いの外であり、この傷手をどう手当てするか、頭の痛いところだ。

秀吉が生きていたならば、何か方策を捻り出したかも知れない。朝鮮の土地を与えようにも、受け取る者がいない。補給もままならない外国の土地など、迷惑ばかりが多く、利益どころか損のみ多大な土地である。恩賞としては使えない。とすれば、秀吉の保持していた金銀で今回の戦の補償をするか。それには、秀吉の遺児秀頼の今後のことが関係してくる。幼い秀頼に味方をさせる代償の金銀がどれ程掛かるかまだ予想も付かない。一文たりとも余分な金銭を使いたくない。そこに三成の唐入り失敗論の本音があった。

家康は勝ち戦論である。勝ち戦ではあるが与える領地が無い。しからば損失した水軍の船の補償代金くらいは、与えねばなるまいという論法だ。金の出所は当然、この戦を仕掛けた豊臣家ということになる。当然豊臣家の弱体化を狙った意見である。幼い秀頼が天下人として君臨するには、五大老、五奉行の設置くらいでは権力維持組織として全く働かない。

三成としては実力派の大名の大多数を納得させ、組織の内部に取り込まねばならない。だが、味方とすべき大名連に与えるべき金銀は、出来るだけ出したくない。しかもその判定の主体が、実質自分というのでは、実力派の大名にとっては面白くない。後方にばかりいて、ろくに戦もしないで、武器弾薬、食料の輸送が遅れるからと、戦闘の勢いを削ぐことばかりに気を使ってと、評判が良くないことは三成にも分かっている。

実力派大名にとって戦は勢いが肝心、銭勘定は二の次三の次というわけだ。ただ秀吉に見いだされて大名の仲間入りをした者も多数いる。その陰に三成の推薦があることもよく分かっている。秀吉亡き後、家康が天下を狙っていることも彼等は知っている。さてどちらに味方するか、戦国はまだ終わってはいないのかも知れないのだ。

「弥五郎、この評定の落ち着き先はどうなるのう」

義宣もこの評定に参加している。文禄の役に、後詰めながら参戦しているので三成に呼ばれたのである。

「難しいでしょうなあ。太閤殿下が生きておいでなら、例の人たらしの^{くぜつ}口舌で何とか収まりを付けられるのですが、…」

何度も首を左右に捻りながら、膝先の煎茶で喉を湿す弥五郎の目が暗かった。

「徳川殿は太閤殿下の後を襲って天下人になるつもりかのう」

「左様に思われますな。何しろ秀頼様は幼なすぎて、いくら石田殿が肩入れしても、太閤殿下の後を^つ嗣ぐのは無理と申すものでありましょう。」

「とすると、どうなると思ってか、弥五郎、申してみよ」

「さあて、どうなりましょう。私めのような、鈍な頭では分かりかねます」

この評定は七日間で終わった。結論は勿論出ない。それぞれ護衛の人数を引き連れての評定参加である。京などという贅沢な場所に長期間滞在するわけにはゆかない。^{おんごく}遠国からの参加者は道中の費用も馬鹿にならない。評定は七日、お後の纏めは五大老、五奉行にお任せするとの結論は、評定の始めから或る程度見えていたことであつた。ならば無用な長居は^{ごめんこうむる}御免蒙ると、早速に帰国の用意を家臣に命ずる大名も多かつた。

義宣もその一人である。できれば京までの遠い道のりの旅行など、御免蒙りたかつたが、加藤清正、片桐且元ら太閤恩顧の勝ち組の勢いが強く、其処もとの助力が是非必要と三成から使いが届けば、出掛けて加勢しないわけにはいかなかつた。北条攻めの折の、秀吉への斡旋、さらに二十万石近い、実質上の加増の推薦も受けた恩義が有る。上杉景勝は出席を断つた。家康の呼びかけた戦評定など出る謂われは無いと、にべもない返答である。

第十五章

秀吉が信長の一部将に過ぎなかった頃からの配下であった彼等勝ち組にとって、^{きたのまんどころ}北の政所 と呼ばれる、おねの言動が重要であった。おねは、秀吉の子を産めなかった。だから淀が秀頼を産んだことについては、仕方のないことと思っている。ただ秀吉亡き後の淀の行動には不安を感じていた。淀とて浅井、柴田と秀吉との苛烈な戦を体験しているではないか。その中で秀吉はあれまでの男になったのである。秀頼をどこぞの大名に預けて、弓矢取る身の基本から鍛えて貰わねば、秀吉の後嗣ぎなど望むべくもないと、おねは思っている。淀は甘い。信長様の姪御という立場がそうさせるのだろうか、そうなると木下藤吉郎時代から苦勞を共にしてきたおねには、分からない世界であった。

信長様さえ今川を切り、足利將軍を何処かへ追放して、天下を自分の者にしたのだし、夫秀吉にしたところで、織田家を盛り立てようなどと思ったこともない様子。自分で関白への道を切り開いた。天下人になるなら、そのくらいの経験や知識や覚悟が必要だろうに、淀殿は何をお考えなのか、おねには分からない。秀吉亡き後も、戦国武将の妻であった感覚は現在も衰えていない。夫秀吉亡き後は京の二条付近に、側使いの男女数人と暮らせる、屋敷とまでは言えぬが、そこそこの住まいを用意して、元関白の未亡人としての体裁を保てるように面倒をみているのが徳川家康だからというわけではなく、今、現在の第一人者は家康だろうとおねは思っている。ならば家康が天下人たらんと行動するのは当然であろう。嘗て織田家がそうであったように、豊臣は徳川の家臣として仕えれば良いまでの話、その何処が淀に分からないのか。そのおねの所へ、加藤以下の勝ち組が機会が有れば立ちより、秀吉の思い出話に花を咲かせた。

「殿下には全く弱らせられた。なにしろしれっと仰せだから、こちらは何気なくお受けしてしまうのよ。畏まりましたとなあ。」

清正が温くなった白湯を飲みながら、大口を開けて笑った。

「それぞれ、お受けした後で、こりゃえらいこっちゃと内心しかめ面をこいたわ」

片桐且元が、おねのつけた漬け物を口に放り込む。

「それがあの人のくちわざ口技とでもいうものかね。わたしはまたやってるわと、お前さん達がひっかかるのを見ながら、笑いをこらえるのに苦労させられたよ」

ほ、ほ、ほとおねが笑い出す。

「だが殿下は、無理のさせっぱなしは、決してなさらなかったのう」

且元が一人で頷きながら呟く。

「まったくじゃ。後でおつりの出るほどの褒美を下された。だが唐入りのことはどうされるおつもりだったのかのう」

清正が真面目な顔で且元の間を見つめた。且元は慌てて目をそらす。清正の眼の力は普通に見られただけでも、背筋まで射通されるように感じたと言われる。まして今は清正も必死の財政状態にあがいているときだ。何しろ水軍の損害がひどかった。清正は外国との貿易で、なかなか年貢の高が上がらない財政を凌いでいたのである。それを唐入りで大方の船を沈められてしまった。船が無くては貿易ができない。

「虎が吠えそうじゃのう」

おねは相変わらず笑顔を崩さない。だが、虎と清正を若年の時の名前と呼ぶときは、秀吉ならこうしたであろうというようなことが、あとに続く事が多い。

「ところで、三成は何と云うてじゃ」

「は？」

と聞き返す清正に

「虎の子の船のことじゃよ。唐入りで沢山失なったそうではないか」

「よく御存知で」

清正は苦い顔をした。

「政所様にもろくな土産も持参出来ぬ有様で……」

「政所様はやめておくれ。おねでよい、おねで。家の人と粥を啜り合った仲間ではないか。こんなときの他人行儀は水臭いだけよ。左吉は何と云うてじゃ」

左吉とは石田三成のことである。

「負け戦に払うものは無いと言われました」

「虎ともあろう者が、それで引っ込もうものかよ」

おねは三成と清正達の確執を見抜いていた。

「左吉も、えろう計算高いよって、おまはん達とは反りが合わんのと違うか？」

「反りが合うの合わぬのなんぞというところは、もうとつくの昔のことで…」

清正がうんざりした表情で横を向いて、ぺっと唾を吐いた。

「おふくろさま、失うた船の価くらい払って貰わねば、九州などは裸同然でござる。外国から攻められたら如何する所存やら、全くもって理不尽千万」

と清正も昔の虎之助にもどってこぼすのだが、すでに船を発注し、二、三の船はできあがっていると、専らの噂である。

清正は伝えられるような猪突猛進専門の大名ではない。むしろ貿易で経済をはかり、懐を膨らませようと励んでいた、商売人としての一面も強かった。ルソン、アンナン、シヤムなどからの品物を購入して、秀吉に献上した。秀吉はその返礼に品物の価以上の金を常に与えた。秀吉の全国制覇は、武力のみによるものではなかったのである。秀吉に反抗する大名は、まず経済的に締め上げられた。米、麦、味噌、醤油、野菜を始めとする食料の買い占めから始まり、武器弾薬はもちろん、衣類に至るまで籠城勢の手には渡らぬように手配した。

「相手を困らせるンやったら、やたらテツポ撃つより、食べ物渡さんほうが、ええのとちゃうんのん」

と何かの折、おねが何気なく呟いたのが、秀吉の耳に残っていた。食べ物はもちろん、日用品に困ることが、籠城生活には多かった。其処を攻める、秀吉の籠城攻撃戦略の基本は其処にあった。

野戦での清正達の強烈な突撃部隊は、いわば宣伝の^{のぼり}戦のようなものである。もちろん宣伝だけではない。だが、竹中半兵衛、黒田勘兵衛らの入念な検討の末に選び出された、相手の最も弱味とする部分に対する猛攻撃だった。時間が掛かり、数千丁という圧倒的な鉄砲による、相手の精鋭部隊を沈黙状態にした上での、^{いくさ}おおかた輸送部隊に対する猛攻撃である。ほとんど戦にならない状態での勝利であった。しかし^{いくさ}戦は戦、勝ちも負けも。

「いや、もう凄い戦じゃった、何しろ向こうは足軽までが必死の形相で槍を突き出しをって、その突きかたの鋭いこと、下手な士分のものより手強かったぞ」

となる。負け方も強い相手に負けの方が格好が付くわけだから、話は自然こうなってしまう。勝ち方の話となれば、尾緒の付き放題となる。

「いやはや敵の太刀筋の巧みなこと、何度首際まで太刀風を食らったことか、もはやこれまでと^{まなこ}観念の眼を閉じようとしたが、幸い味方の鉄砲玉が相手に当たってよ、危うく助かったというわけじゃ」

ということになる。真相はいずれ当事者の話で明らかになる。しかし、話としては大袈裟な方が面白い。面白い方の広がり方が早い。早く広まった話が真実として信じられる。秀吉の全国統一は、後半三分の二がこのような戦であった。秀吉には敵わないとの思い込みを全国に^{るふ}流布させた。戦意を喪失した相手に、圧倒的な戦力を見せつけて、降伏させるのである。この攻撃の以前におねの呟きにヒントを得た買い占めが行われた。それも商人に身を^{やつ}窶した秀吉の配下が、徹底的に買い漁った。籠城戦では百姓仕事の経験を、野戦では信長家臣としてのそれを、十分以上に活用したのが、秀吉の政治家としての成功の要因であった。

三成はおねの居宅を訪れることは無かった。専ら大阪城に伺候して秀頼と淀の機嫌を取り結ぶことに余念が無かった。秀吉の作った五大老、五奉行のシステムを固く信じている様子である。淀はそんな三成をすっかり信用している。戦国はまだ終わっていないとみるおねと、にわか作りの政治的仕組みを信じる三成や淀の違いが、いずれ摩擦を起こさずには済まないことを、弥五郎は心の奥に感じていた。それは弥五郎の期待の疼きでもあった。

おねが見抜いた通り、清正達と三成を中心とするグループとは、利害が対立した。

秀吉の築いた天下が組織として機能するには、秀頼が幼なすぎた。秀吉の残したものは安定した天下ではなく、巨額の金銀であった。三成はその金銀を背景に、豊臣家の天下を継続拡大しようとした。これは事実上三成の天下ということである。それでいいという大名も結構大勢いた。いや、あの男はまだ天下取りの仕事をしていない、と見る者達も同じ数ほどいた。このグループの代表が徳川家康だった。仮に三成を文治派、清正等を武闘派と呼ぶなら、この両派の争いは、そのこと自体、戦国の世が未だ終わっていないことを示していた。

家康は確かに五大老の筆頭格であったが、正式にそう決めた者は誰もいない。にも関わらず、家康はそのように振る舞った。巨大な二条城を築き、其処に挨拶をしにくるようには催促をした。

形は一応招待状だが内容は強制に近く、大坂城の秀頼にもこの書状が届けられたとなれば、家康の野心は見え見えであった。文禄の役以後会津に帰ったまま、京にも大坂にも出て来ない上杉景勝にも、この書状が届いた。返事は判で押したように、城の修復、城下の整備、領国の検地に、「夜も日も分かたず暇無く御座候」である。景勝の言い分には道理が有った。会津、佐渡、出羽米沢合わせて百二十万石を整理するのは、容易なことではない。平時ならそれが分からぬ家康ではない。だが家康には上杉をこのままにしてはおけない理由が有った。景勝が三成と盟約を交わしたのではないかという疑惑をもっていた。

おねの戦国の予感、反逆者上杉への出兵という形で現れた。本来ならば秀頼の上意となるべきところだが、家康は五大老筆頭として、自己の威力を示そうとしていた。己に従うか従わないかを露骨に^{けんじ}顕示していた。

第十六章

慶長九年の秋、仙北一帯は連日早霜に見舞われ、田畑の作柄殊に稲の出来は絶望的であった。あと十日も夏の名残の日照が有れば、稲に十分実が入るというのに、どんよりと曇った空からは、冬を思わせる鳥海おろしが吹き渡り、百姓達の野良着の襟をかき合わさせる。

その日の昼過ぎ、佐竹義宣は父義重の居館六郷城の一室で、渋江弥五郎と村山惣兵衛を前にしていた。

「やはり、無理かの」

頬杖を突いたまま、義宣はふうっと溜息をもらした。

「されば…内密にというわけには参りませぬ。金子も人手もなまなかの合戦以上のものござりますれば、集めにかかれば必ず人目を惹きまする」

扇子の柄で机の上に拵げた見積書を示しながら、弥五郎は惣兵衛を目で傍へ寄れと合図を送った。

「殿、これほどの人数、この地ではどうやっても集められませぬ」

弥五郎の扇子の柄は書き付けの一カ所をぴたりと抑えた。

「三千人。うむ、なかなかの人数だの。これほどの人数が要るものなのか」

義宣は惣兵衛に目を移した。鉾脈鑑定つるの時に一度会っただけの男であったが、大谷刑部おおたにぎょうぶ配下の侍大将まで勤め、関ヶ原敗戦の後、ここ仙北小野に流れて砂金拾いを業としていると聞いた。何しわ度も修羅場を踏んでいるせいか、髪ひるの半ばは既に白髪となり、渋紙色に日焼けた額には深い皺が刻まれていたが、義宣の面前に出ても怯む色がない。物静かに義宣の目を見返しているだけだが、その眼の底にじっと腰を据えている、不透明な淀みを義宣は感じていた。

「惣兵衛、何故これ程の人数が要る。食わせるだけでも容易ならぬがのう」

「食わせは致しませぬ。それぞれ勝手に食うていきましょう」

惣兵衛は僅かに唇のあたりに笑みを浮かべて言葉を続けた。

「三千人というは一時のこと、やがては一万にも二万人にも人が増えましょう。それを一々食わせることなど、誰にもできませぬ」

「成る程、そうなるか」

しばらく間をおいて

「弥五よ」

横に控えている弥五郎に声を掛けた。

「このこと内密に行うは無理だと言うたな。」

^{ぎょい}
「御意」

「開け放しで行うというのは、今の惣兵衛の話を聞いての上でのことじゃな」

「お言葉通りにござる」

「どうしても^{かな}適わぬか。せめて三年ほどでも…」

義宣としてはどうしても銀が欲しい。できれば内密に。惣兵衛は微妙に揺れ動く義宣の表情を見逃してはいなかった。

「これまでの掘り高の十倍ほどなれば、内密に掘ること無理ではございませぬ。なれどそれ仕切りの銀では、殿のお望みの役には立つまいかと存じます。殿お望みの何万貫もの銀を掘るといことになりますと、とても内密というわけにはいきませぬ」

うむ、うむと^{うなづ}義宣は頷いた。この男、^{ひとすじなわ}一筋縄ではいかぬ。弥五郎が鉾山開発を開け放しで、と考えを変えたのは何故か、後でゆっくり考えてみなければならぬ。

「大方の所は分かったつもりだが…」

義宣は見積書を弥五郎に向けた。

「開け放しとするならば、この見通しですらすらと銀が掘れるのだな」

惣兵衛と弥五郎は思わず顔を見合わせた。

「もう一度、とくとその書面を^{ごらん}御覧願わしゅう…」

と頭を下げた。

「先程から飽きるほど眺めて居るわ、これ以上何処を見ればよいのじゃ」

「ここに鉛二千貫とござりますな」

弥五郎はもう一度書き付けを義宣の方に回し返して指で示した。

「確かに、そう書いてある、それが？」

「どのようにして二千貫もの鉛を集めるか、なかなか難しき事にて…」

「弥五郎よ、人数集めが難しい、鉛集めが難しい、お主の言うことを聞いては、とても銀など掘れそうもないの。第一、鉛がこれほど要るのはどうしてか、儂には分からぬぞ。この出羽の領内にも鉛山が有るではないか」

「されば」

弥五郎は惣兵衛に^{あご}顎をしゃくった。説明しろという合図である。

惣兵衛が義宣に説明したのは「灰吹法」という、金銀の精錬法のあらましであった。唐臼で鉱石を砕いて金銀を含んだ所を荒選りし、それを鉛と一緒に熱して鉛の合金「貴鉛」を作り出す。この合金の延べ板を、骨灰と共に高温で熱すると、鉛が灰に吸われて消え、後に金銀だけが残る。この方法だと従来の鉱石をただ熱するだけの方法よりも、良質の金銀が数倍の収量で吹き上がる。一度貴鉛を作り、そこから鉛を抜くのが、灰吹法の要ではあるが、それだけでは上手く行かない。もう一つ二つ踏まねばならぬ手順がある。惣兵衛はこの秘法を文禄の役で唐入りした折に、彼の地の鉱山で会得していた。今、義宣に話したのはそのあらましであって、仕上げの部分は用心のため伏せてある。当時としては当然の用心であるし、一国の領主が知らねばならない知識でもない。

義宣の前の領国の常陸にも足尾の銅山が有り、その精錬法は義宣も知っていた。しかしそれはただ鉱石を焙り焼きにするだけの、昔ながらの精錬法で、鉛を使う灰吹法を義宣は知らない。銅を吹くのに灰吹法を使うことはなく、義宣が知らなものは、或る意味、当然であった。

「鉛の要るのは分かったが…」

語を継いだ義宣は。

「二千貫ほどなら、さほど難しいことはあるまい。ここ秋田仙北にも鉛山が有るらしい。それで足りなくても、買い付けの金子は大したものであるまいに…」

「さ、そこでござる、殿」

一膝 弥五郎が乗り出した。

「うむ」

「二千貫は手始めにて、ひとたび銀を掘り始めますと、掘り出す銀とほぼ同量のものが要ると思し召せ」

「何、銀と同量とか」

義宣の目が、もう一度書き付けの上を走った。

「すると、幾万貫の銀にはそれと同量の鉛が要ると言うのか」

「御意、いずれ御領地内の鉛山を掘ることになるのは必定、然しそれを待っている余裕はございません」

第十七章

どれ程の鉛が要るのかは、鉱石にどれほどの金銀が含まれているかによって決まる。それにせよ、^{ぼうだい}龐大な量の鉛が必要なことは事実である。惣兵衛は目を^{つむ}瞑って、主従二人のやりとりを聞いていた。

「なるほど、多量の鉛の買い付けは、徳川の目を引くことになるか。佐竹が^{むほん}謀反の用意を始めた、何万貫の銃弾を^い鑄始めたとな」

「難しいとはそのことにござります。ここはどうしても、殿から鉛集めのこと、大御所様のお許しを得ていただきとうござる。そのため、当初から銀山開き、開け放しにするほか無しと^{ぐこうつかまつ}愚考仕りまする」

「金銀はひとりでに人を引き寄せます」

それまでじっと瞑っていた目を開いて、惣兵衛が^{つぶや}呟いた。

「途方もない銀が地に眠っているということだけで、三千、五千の人数が立ち所に集まること疑い有りませぬ。鉛が銀に換わると言えば、鉛も向こうから飛んで参りましょう。

肝心なのは始めの一押しかと存じます。間違いなく大量の銀が有ると人々が信じること。三千人の人間と二千貫の鉛は、その一押しに必要なもとでに過ぎませぬ。

しかしながら多くの人数と鉛とを集め、それをひた隠しにすれば、^{いくさ}戦の用意と疑われるのも世の習いと申すもの。渋江様にも申し上げたこととござりますが、その辺のことは、我等一介の金掘りの^{あずか}与り知らぬ事とざりますれば、宜しきようにお取りはからい下され。」

^{さる}申の^{こく}刻下がりになって、^{あぶ}炙った干し魚に濁り酒という粗末な酒肴が惣兵衛に供され、その日の顔合わせは終わった。院内銀山をどうするか、基本的な方針を決める最終段階に差し掛かったのである。

惣兵衛が六郷城を出たときには、薄暗い、夜気を帯びた風が野面を吹き渡っていた。城門を僅か離れた地藏堂の後ろから、二つの影がひっそりと寄り添った。小野の里でこの数年共に砂金拾いをしている、配下の若者だった。

「親方無事で何よりだ」

影の一つが^{ささや}囁いた。影はこの季節には厳しすぎる夕冷えを、背を丸めて腕組みに耐えていた。

「心配するなど言うたではないか。奴らが^{わし}儂を殺すつもりなら、城になど呼び出すものかよ」

「いやいや、何をやらかす奴らだか、腹の底は分かんねえと、そう言ったのは親方じゃねえかい」

「ありがとよ。儂の身を案じてくれるのは有り難いが…小野に何か有ったら頼りになるのはお主らだけだ。それを忘れて貰っては困るぞ」

二つの影の一つは石井茂助、いまひとつは太田利平という、惣兵衛と同じ関ヶ原敗残の兵だった。それぞれ姓を持っているので、士分であったことは分かるが、この辺りまで逃げて来るといのは、まずは^{ぞうひょう}雑兵に近い身分のさむらいだったのであろう。何の誰それと名の知れた武士は、徳川の厳しい追及と探索の目を逃げ切ることは、非常に難しかった。

茂助は^{はたち}二十歳、利平は二十五、それぞれに負け戦の惨めさを抱え込んだ若者達である。利平はおそらく今後戦に出かけることはないだろう。ここにきて^{めと}娶ったおかかに子ができて、今はその子に夢中だ。

茂助は機会があれば合戦の場に出掛けるかも知れない。時々酒の^{さかな}肴にする惣兵衛の戦さ話を聞くときの異様な目のきらめきが、茂助の胸の中で騒ぐ血の臭いをあらわしているようで、惣兵衛には気掛かりだった。

「いずれにしろ、今が今、俺達を殺す気は奴らにはねえ。いや、そうならぬように手を打ってあるつもりだ。奴らは俺達を殺したいのではない。銀が欲しいのだ。銀が欲しい間はそう簡単に農らを殺せぬはずだ」

茂助、利平ばかりでなく、小野の砂金拾いの一党が^{おび}怯えている心中は、惣兵衛にもよく分かっていて。院内にいた銀の堀子二十人ばかりが、つい先頃不意に姿を消した。ついで、院内差配の川井伊勢が、久保田のお殿様のお手討ちに^あ遭ったという噂である。

その後院内の堀子の一人が、山中で斬殺体になって見つかった、全員が殺されたのだという^{うわさ}噂も流れた。

それぞれが確かめようもない噂だったが、惣兵衛にはその噂が或る程度的を射ていると信ずる根拠があった。義宣、弥五郎と共に鑑定した、院内の^{けたはず}桁外れに豊富な銀の^{つる}鉦脈がそれである。

佐竹家の内情など知るべくもなかったが、銀に^{から}絡んでかなりの人数の血が流されたこと事は間違いない、と惣兵衛は信じている。

そしてその血生臭い風が、銀山開発に関する弥五郎の打診という形で、小野の里にも吹き始めた。院内の銀を掘らぬかという話があったとだけ、惣兵衛は一党に伝えてある。

^{ばくだい}莫大もない鉦脈の話など誰にも話していない。^{うかつ}迂闊に話せば命がないくらいのは、弥五郎に念を押されなくとも分かっていることである。

しかし、院内の銀に関わるというだけで、小野の一党は震え上がった。またぞろ銀を掘らされたあげくに、皆殺しにされるのではないか、というわけである。

惣兵衛としては、そう毎度毎度堀子を殺して、銀など掘れるものかと一笑に付したいところだが、佐竹義宣の顔を^{まなうら}眼裏に浮かべると、背筋に冷たいものが走るのを抑え切れなかった。

義宣が^{なめかた}行方 三十三館の領主、豪族を酒宴にことよせて一堂に集め、一気に^{せんめつ}殲滅してその領地を拡大した話を、主君大谷刑部から聞かされたのは、小田原の北条攻めの陣中であつた。

「殺される方も^{うかつ}迂闊な話じゃが、それにしても佐竹の^{こせがれ}小倅、石田殿の名を餌に使って釣り上げるとはな。戦さより悪知恵に^た長けていると見える」

吐き捨てるように言った主君刑部の顔は苦り切っていた。

^{たいこうみょうだい}太閤名代 石田三成が出席し、帰順の意志表明を代償に^{しりょうあんど}所領安堵を保証する^{うたげ}宴 だと言え、群小土豪に拒否できるはずもなく、いわば無抵抗状態にしておいて踏み潰すような遣り口だったのを、剛毅な刑部は^{きら}嫌ったものだろう。

しかし、義宣の父義重が、その剛腕に物言わせんと、何度攻め掛けても屈服させ得なかつた鹿島行方一帯を、義宣が一夜にして併呑したことは間違いない。あの一見温順そうな顔の下で何を考え、何を行おうとしているのか、惣兵衛にはとても読み切れる自信が無かつた。

横堀から小野の里に向かう辻の酒屋で、店を仕舞いかけていた亭主から二升の^{にごりざけ}濁り酒を買い入れ

、「もし儂を消すつもりなら、さしずめこの銭が^{さんず}三途の川の渡し賃というわけか。それにしては、ちとはずみすぎているようだ」

惣兵衛は笑つたが、二人の若者は声を洩らさなかつた。

「今日の首尾を話すから、飯を終えたら儂の家に集まるように、皆に伝えておけ」

二升入った酒徳利を抱えて惣兵衛は自家の土間に入った。

^{すき}鋤き、^{くわつるはし}鍬、^{さき}鶴嘴といった砂金拾いの道具が、壁一面に立て掛けられたり吊されたりしている。その傍に^{みざる}蓑笠、^{じゃかご}蛇籠の類が積み重ねられ、その奥で囲炉裏の火がちらちらと揺れている。

「お帰りなさいませ。御無事で何よりにござります」

竈の陰からかけ寄つた女房のかめは、刑部の遠縁の娘である。

武家の言葉がなかなか抜けない。刑部は関ヶ原の直前に惣兵衛夫婦を出羽方面に逃がしていた。三成の挙兵を聞いた直後のことである。刑部は小早川の裏切りを早くも読んで、有能な配下を逃がしていた。自らはハンセン病のこともあり、この戦さで死ぬつもりであつた。

三成への盟約上、戦には加勢する。東西どちらが勝つかは分からないが、その時自分は生きてはいないと決めていた。大谷勢が小早川勢と隣り合わせの陣立てになろうとは、思いがけない事であつたが、都合の良いことでもあつた。惣兵衛は良い主人に抱えられたと言えようか。

第十八章

「おう、無事でこのうてなんとする。…飯が済んだら寄り合いがある。茶碗の支度をしておいてくれ。肴は何か少しずつ持ち寄ろうから、心配せずとも良い。…五郎次、^{すす}濯ぎをこっちへ…早くせんか」

声に応じて、かめの背後の暗がりから、たらいを抱えた五郎次の青白い顔が現れた。

「急いで飯じゃ。うむ、お前達も早く飯を済ませると良い、皆がやって来ぬ間にな」
野草を湯がいてエゴマで和えたもの、落ち鮎の焼き干し、それに粟の粥、いつもながら小枝一本燃え切る間もない夕餉である。

「親方、今日は例の黒焼きは宜しいんですかい」

土間の隅に ^{うづくま}蹲っていた五郎次が、口ごもるように言った。惣兵衛の目が一瞬鋭く声の方に走った。

「おう、それぞれ、忘れるところであった。要るぞよ、要るぞよ、若返りの妙薬」

「へい」

棚の隅の壺から、小皿に僅かに盛った黒い粉を、五郎次が膳に載せた。口に含んで汁で飲み下し

「苦い。なんともかとも、飲みにくい薬だて。いもりだかヤモリだか知らぬがどうだ、お前も飲んでみるか、その ^{あおびょうたんづら}青瓢箪面 が、男らしくなるかも知れぬぞ」

土間の隅に引っ込んで蹲った五郎次の背中に目がとまると、ずっとその頬から笑いが消えた。

つい一月程前に、砂金を引き取る能登屋からの頼みで、金堀の仲間に入れたのだが、まだ小屋を建てる金ができず、惣兵衛の家で寝泊まりがてら、下男のかわりをしていた。

掘り貯めた砂金を米塩その他の物資を購入するため、月に一、二度は、泊まりがけで能登屋の店のある土崎湊に出掛けるのが常である。

砂金その物は、毎度一定の量が採れると決まったものではない。農作物のように種苗から育成できるものでもない。採るほどに絶対量が減ってゆく。だがふとある日大量に採れる日もある。

そんなこんなで米塩や古着、布等は必ず要るので、前借りの形で物資を受け取ることも珍しくない。

それで、能登屋から頼まれれば下働きの一人や二人、居候をさせないわけにはいかないのだが、近頃弥五郎の手の者と、能登屋で出会うことが多くなったのが、惣兵衛には気になっていた。先日は弥五郎自身の、能登屋を出て行く後ろ姿を見た。

大名と商人とが時を同じくして動き出すのは、戦さの前兆と相場が決まっている。しかし、佐竹が今戦さを始めることは考えられない。考えられるのは銀山の開発に本腰を入れることだけだ、と惣兵衛は見ている。

佐竹にとっては、これも形こそ違え戦さの一つだろう。それは自分達、小野の砂金拾いにとっても同じ事なのだ。一つ間違えば、皆殺しの血の池地獄が待っている。しかし、もう一方には、とてつもない金儲けの極楽が見えている。

目も眩むようなくら 剣つるぎの刃渡りが、すでに始まっているとすれば、何処からどのような事態が飛び出してくるか、分かったものではない。例えば五郎次が能登屋の入れたちようじゃ 諜者 だとしても、少しも不思議ではない。

分からないのは、能登屋がどの程度佐竹に食い込んでいるのか、院内の銀のことをどれだけ知っているのかということである。用心に越したことはない、能登屋は能登屋で己れ自身の戦さをするつもりなのだろう、と惣兵衛は思った。

早くも寄り会いに来た利兵衛の声が、土間の入口から聞こえた。

「これはきのう、ワナにかかった兎ですじゃ。炙って肴にと思って」

「弥五郎、先程、惣兵衛の言うた灰吹法とやら、そちら知っておったのか」
惣兵衛の去った後の六角城書院では、まだ義宣と弥五郎の密談が続いていた。

「いや、存じませぬ故、先日惣兵衛に実地に銀を吹かせましてござります」

「どうであった」

「見事なものでござりました。炉を二つ作りまして、一つは灰吹き、一つは従来吹き方にて比べましたが、できます銀のカサがととてもとても比べものになりませぬ。品質は能登屋に調べさせましたところ、これも上々ということにござりました」

「鉛を使うただけで、そのようにも出来上がりがちがうものかの、そもそもいし 鉱石が違うのではないのか」

「いや、それが」

弥五郎の眉が曇った。

「どうした」

「^{それがし}其が直々に見聞致して、優劣無きように計らってござる」

弥五郎は目前の白湯を一口飲んだ。

「鉛だけではないようにござる…実は其も、灰吹き銀の出来上がりがあまりに見事なので、手の者を使って内々に吹いてみたのでござるが、しくじりました。何度やっても上手く行きませぬ。灰吹銀の秘密、鉛を使うだけではないようにござります」

ふ、ふ、ふと義宣は低く笑った。

「惣兵衛もしたたかな奴よの。さもあろう。そう、おいそれと手妻の手の内を明かすことはあるまいよ。…それでどうした、おめおめと引っ込む弥五郎とも思えぬが…」

「恐れ入りました。惣兵衛との話、不調になった暁にも、灰吹銀の仕上げ方だけは吾が手に握っておきたいと、能登屋を通じて五郎次なる者、惣兵衛の下働きとして潜り込ませましてござる」

「ほう、諜者を入れたか。して、どうであった。うまく探り出したか」

「それが、どうも…不慣れな者で、知らせて来る^しことが、何とも不揃い。今日鉱石を何貫掘ったとあるかと思えば、惣兵衛が妻女と交わる夜には、^{しし}猪の干し肉を炙り、滋養強壯の秘薬として食するなど、たわけたことを書き送ってまいり、ほとんど参っておりますわい」

弥五郎は苦い顔で下を向いたが、義宣は膝を叩いて笑い出した。

「惣兵衛め、猪肉を用いているとか。あの白髪頭で猪肉を食ってまで励んでいるとはのう。見上げた者じゃ。天下の好き者だのう。…ところで弥五郎」

「儂はこの月の内に江戸へ参ろうと思う。その折、院内の銀を土産に持参しようと思って居るのじゃが、どうかな」

「江戸への土産に銀でござりますか、」

「何かおかしいかな」

「いえ、秀忠様への土産なら、鷹などの方が宜しいかと存じますが…」

「鷹か、将軍様には鷹狩りがお好きであった。銀のことは報告だけで済むかのう」

「大御所様には、既に院内の銀のことは御承知でありましょう。光悦昨の楽焼き茶碗などは如何なものでありましょう」

「あれか、大御所にあの茶碗の価値がお分かりかの。」

「大御所直々にではなくとも、周りの者の中に、分かる者が居れば良いので…」

「惜しいがな、それに決めるか」

第十九章

この辺で一息入れて砂金及び、「貴鉛」のことを話しておかねばなるまい。古代、東大寺の大仏を鑄造したときに、陸奥から金が採れて、その金で大仏を装飾することができたと記録にある。その金は砂金である。聖武天皇の時代には未だ金鉱石を精錬する技術は、我が国にはない。渡来人の中にもその技術を持つ者はいなかった。

下って鎌倉時代の奥州藤原氏の平泉を中心とした繁栄も、砂金を用いたものである。中尊寺の金色堂の金も全て砂金である。

砂金を袋に入れた馬が、何頭も鎌倉を通り京へ向かったと、これも記録に残っている。これらの砂金の源を知りたいと思うのは人情である。しかし、成功した例はない。砂金がある以上それを生み出す鉱山があるはずだとは、誰でも思いつくことである。もしや其処に巨大な金の塊でも有りはすまいか。ならばその砂金の川を遡って、その大金塊を入手したい。涌谷金山は発見されたが、大金塊はなかった。試みは全て実行されたが、成功例は皆無であった。砂金の純度は概ね90%である。そんな純度の金山を探しても無駄である。

金は普通銀と共に鉱石に含まれている。金鉱石だけが川底に金属粒として採集の対象になる理由は、その柔らかさと比重に主たる原因があろう。それにしろ、純金が川に控えているわけではない。もちろん鉄、銅、銀、鉛等と共に採取される。精錬も当然行われる。

古代のことは分らないが、奥州藤原氏の場合は北上川や衣川とその支流が多分産地かと当たりが付く。その上流には湧谷金鉱山がある。しかし砂金ほどの純度の鉱石など一向に見当たらない。掘るまでもない鉱脈が川底に露出していて、流石などの衝突で金鉱石が剥がされたとすれば、鉱山など無くても砂金ができるだろう。砂金が採れば鉱石を砕く手間が省ける。

金山として一番有名なのは佐渡である。ここでは江戸時代最大の金の生産が行われた。西三河砂金山の砂金拾いなどという作業もあった。だがここではまだるっこしい。鉱石を砕いて金銀を採る方が、ことは単純にして効果絶大であった。砂金は拾ってしまえばそれまでのことである。本の鉱山を探す作業は、ここでは必要とされなかった。

だがその佐渡の金山の金にしても、最も産出量の多かったときでも、実は産出された銀40トンにたいし、金400kgだ。金は銀の1%にすぎない。佐渡金山の実体は佐渡銀山なのであるし、そう言う現実を書いた記録も一、二に止まらない。一番盛りの時がこんな割合であるから、普通なら銀に対して0.5%前後の金が採れば良しとしたものであろう。江戸時代の幕府財政を支えたのは、佐渡の銀であったのだ。

だがその金銀を得るためには、その数十倍の鉱石を掘り捨てた挙げ句の結果であることを忘れてはいけない。余程の成果が期待できない限り、滅多に手を出せない大事業なのである。

金と銀は一般に同じ鉱脈乃至鉱石に寄り合うように存在する。銀を掘る、序でに金を採るというのが、一般的な採掘順になる。その銀を採る方法が灰吹法と言われる精錬法であり、採れた銀を灰吹銀と呼ぶ。

この方法がヨーロッパで行われた歴史は古い。ヨーロッパではBC三千年ころから行われていた精錬法である。そこから中国、朝鮮まで伝わるのはたかだか数百年から千年ほどであろう。

日本に伝えられたのが1533年、石見銀山においてとは、いささか遅過ぎる感じがするが、それが史実らしいから仕方があるまい。結構様々な知識や物を大陸、朝鮮経由で輸入していた日本が、この技術だけ飛び抜けて遅れた理由は、現在でも分っていない。

灰吹法の要点は、鉱石の中の金銀を取り出すために、鉛を使って合金を作ることだ。この合金を「貴鉛」という。当時の朝鮮語でこれをどう発音したか、私には分らない。日本では「キエン」と呼ぶしかなかったであろう。

この合金を獣骨の灰と共に熱すると、鉛が溶けて灰に吸われる。ここから灰吹法の名前が生じる。

この鉛を受けるための、骨混じりの陶器皿が精錬所には必須の品であった。鉛の一部は酸化鉛として化粧品の白粉に使われたが、鉛中毒のために、何人もの役者が命を落とすことになる。

かくして金銀の合金が得られるわけだが、金と銀を吹き分けるには、硫黄と共に熱して硫化銀を作って銀を除去する。と言うよりも貴鉛から金を抽出すると言った方が正確であろう。取り敢えず銀をとりだすには、硫黄と燃料と人件費が掛かる。採れる金との費用の採算が合うかどうか。

よって金を少量含んだ銀が、そのまま銀として使われることも珍しくない。銀が秤量貨として幕末まで扱われたのは、そんな事情があったからである。

秤量貨とは秤にかけてその値打ちを測定する貨幣のことである。さすがに銅銭の目方を量った閑人はいなかったようだが、宋銭と呼ばれる輸入貨は、倭銭つまり国産の銅銭の四倍、乃至二倍、三倍の銭として数えられたようだ。

だから、金貨、銀貨、銅銭の三貨の間に、一定した交換比率は存在しない。一定の日に銭相場が開かれ、金一両が銀五十匁とか、銀一匁が四百文とかの相場が立つ。両替屋が独立した商売として、大いに繁盛したわけである。この相場制も事実上明治になるまで続いた。

第二十章

慶長の役と呼ばれる第二次朝鮮派兵は、慶長二年(1597)に開始された。慶長四年にも大量増員が行われる計画であった。秀吉はそれまでに占領した朝鮮各地の城郭を補強すると同時に、さらにその外側に新たな城郭群をを建設して、領土の恒久化を目指していた。東は蔚山^{ウルサン}から西は順店に至る地域である。この整備期間である慶長三年は攻勢を採らない方針が、秀吉の命として発せられている。これらの城郭完成後は、守備軍を残して帰国する予定であった。

ところがこの予定で築城を急ぐ日本軍に対して、明・朝鮮の連合軍が猛攻撃をかけてきた。蔚山倭城（日本式に建て直した蔚山城）には五万六千九百人が押し寄せた。

この城を守ったのは加藤清正を中心とする日本軍であったが、倭城の攻城法に不慣れなこともあり、少なからぬ損害を出した連合軍は直接の城攻めをやめ、包囲戦に切り替えた。

この時点で実は蔚山城は未完成であった。食料や武器の蓄えもろくにできていない状態での籠城になり、日本軍は何よりも飢えに悩まされ、このままでは落城かというところまで追い込まれた。毛利秀元らの援軍が到着し、包囲する連合軍を攻めて二万人の損害を与えた。たまたら連合軍は敗走した。

そもそも蔚山、順店、梁山の三城は地形的に孤立していて、援軍を出すにも困難であることを説明して、これらの城の放棄を宇喜多秀家ら十三人の大名が秀吉に進言したが、秀吉はその進言を却下し、却って進言者を強く叱責した。

敗走した明・朝鮮連合軍もすぐには反撃体制を採るまでには至らず、日本軍の城郭整備、火器の増強、食料の備蓄等が着々に行われるのを傍観するより仕方がなかった。各城郭の整備が完了すると、守備軍として九州勢が各城に配分され、後の軍勢は後々の派兵に備えて順に帰国した。

蔚山城の攻防で両軍一休み状態になったが、連合軍にとっては占領された地域の奪回が急務であった。朝鮮宮廷からの軍部に対する強い要求も有った。ぐずぐずしていると、占領軍と通じる将軍が出て来る可能性さえある。朝廷としては急がねばならなかった。

朝鮮軍が急編成されている最中の慶長四年(1599)八月十八日に秀吉が死去する。残された五大老、五奉行は朝鮮からの撤兵準備を密かに始めた。だが秀吉の死は隠されたままの作戦である。撤兵の理由付けに時間が掛かった。そこに俄仕立ての明・朝鮮連合軍が三カ所に別れて襲いかかった。

慶長四年九月、連合軍は蔚山、泗川、順天の三路に別れて攻勢を掛けてきた。いわゆる三路の戦いと呼ばれる慶長の役最後の戦いである。この三城同時攻撃の、明・朝鮮連合軍の兵力は十一万人を越え、文禄・慶長両役を通じて最大のものであり、かつ兵糧や武器弾薬類も十分に整っていた。にもかかわらず三城全ての戦闘に敗退した連合軍は、溶けるが如くに潰え、人心は脅えきって逃避の準備をした、と宣粗実録に書き残されている。

連合軍の実体は、その大方は農民・町民の野次馬的烏合の衆だった形跡がある。十一万人というのは、明・朝戦の政府から武器食料等を支給された、正規軍の数であった。その何倍かの野次馬軍団が纏わり付いていた。

でなければ泗川城を守る島津軍七千に連合軍の二十万が襲いかかり、八万人を討ち取られて敗退したと言う記録の真偽が問題になろう。連合軍の陣中で火薬の爆発事故があり、その影響で連合軍が混乱したそうだが、事故そのものが戦慣れしていない者の存在を暴露している。その始末に混乱するようでは、精鋭島津の敵ではなかったろう。

そもそも三城合わせて十一万人の連合軍ではなかったか。泗川だけに二十万とは、勘定が合わない。

それはともかく日本側の善戦により、撤兵は順調に進んだが、撤退後の日本では、秀吉没後の権力争いが待っていた。渡海した者達は勝利したとはいえ、疲労甚だしかった。逆に唐津辺で後詰めに当たった者達は全く唐入りの影響を受けなかった。中でも徳川家康軍は元気そのものだった。五大老の先頭に立つ勢いである。引き上げの命令も彼が出した。

このような大きな戦のあとには、戦績評価が行われる。この場合、勝ったのだから、褒美が与えられる筈である。

その会合が京の伏見城で行われた。参戦した大名連中が呼び集められた。義宣ももちろん出掛けた。

そこで問題になったのが、如何なる方法で戦勝に報いるかということであった。

国内なら領地加増が普通だが、この場合はどうか。八道分割まで行ったのだから、それを与えるということも考えられるわけだ。

だが、誰もそれを希望しなかった。朝鮮の土地を領地にするための苦勞が如何なるものかを、骨身に染みて分かっていたからである。

「では、金銀で褒美を取らせては如何か」

家康が辺りを睨み回しながら、塩辛声を張り上げた。

「して、その金銀とやらは何処に有るのであろうか」

涼やかに応じたのは石田三成であった。

「この戦、太閤殿下が始められたのじゃから、豊臣家から出されるのが当然であろう」

「あいや、勝ち戦とは言え、土地も金子も何も彼の地から持ち帰って居らぬ。まるで逃げ帰ったのと違わぬではないか。報償など考えられぬ。先ずは自領・自軍の休養、養生を計るが先決ではあるまいか」

三成としては、未だ五歳の幼い秀頼を守り育てる莫大な資金が必要である。つまり秀頼への臣従を金で買おうという魂胆である。滅多なことで吐き出せる金子ではない。家康としてはそれこそが一番迷惑なことである。少しでも豊臣の影響を削いでおきたい。

というわけで、両者対立のまま会合はお流れになった。

このやりとりに不満を感じたのは、加藤清正始め朝鮮で目覚ましく働いた部将達である。戦死した部下の家族への補償金も払わねばならない。負傷した部下への手当も疎かにはできない。大量に消費した武器弾薬の類も補充しなければならない。大きな戦の後始末には例え勝ち戦でも結構な金がかかる。

それを、石田の奴、何もよこさんだと。部下達への報償をどうせよというのか。何かというと太閤殿下の御威光を笠に着て、ああでもない、こうでもないだの、ああせよ、こうせよだのと、こうさくて適わん。特に検地、石高の細かい規則の制定は、三成奴の入れ知恵だ。迷惑千万なこと。太閤殿下の亡くなった今、奴の言うことなどに諾々と従ってられるか。

血の気の多い武闘派は、石田三成を憎み怒った。

「尤もな事よ。唐入りの費用も馬鹿にできんでのう」

心底同情する口振りで相槌を打つのは徳川家康だ。

「儂も唐津まで後詰めに出張ったが、それでも馬鹿に出来ぬ費えじゃった。殿下が生きておいでであったなら、必ずやこの戦の費えを補って下さったであろうよ。」

それとなく、三成の批判を煽っている。

第二十一章

現実的に収入の無かった戦から、なにがしかでも引き出そうとするのは無理であり、豊臣家を弱体化しようとする徳川の陰謀と疑う連中も当然いた。秀吉の葬式がどうの墓がどうのと、五大老の頭領じみた口の利きようである。誰もそんなことを頼んだ覚えはない。だが今のところ、実力が他の大老を遙かに越えているので、異を唱える者がいない。文禄、慶長両役の戦績評価の会合を京で開こうと言いだしたのも家康である。

京、大坂には大名それぞれの邸宅が構えられている。領国に引き上げている者も、京へなら呼び出しやすい。上杉景勝は唐津からの引き上げ途中で京に滞在、義宣は常陸から出掛けた。この会合の最中に、ひよんなことから福島正則等一党と三成が町中で出会い、正則等が刀を抜いて三成を追いかけるといふ騒動が起こり、逃げ場に困った三成が、事もあろうに家康の屋敷に逃げこんだ話は有名である。

この話の肝心なところは、家康が正則等を^{たしな}宥め程度で咎め立てせず、三成には

「石田殿のやりすぎもお有りの事と承った。この際、^{うわべ}上辺だけでも謹慎されて、佐和山に引かれては如何」

と持ちかけたことである。当然五大老、五奉行に計った。片手落ちは承知の上での嫌がらせと誰にも分かる仕打ちである。当然三成方、家康方に別れて^{かんかんがくがく}侃々諤々の罵り合いになった。

一刻程経って再度招集の声がかかったとき、五大老の一人上杉景勝の姿が見えない。聞けば国元会津の整備がまだ心許ないので、先に失礼するが、自分の意見としては石田殿には落ち度無しと存ずる、との伝言であった。

上杉家はつい先年秀吉から転封を命じられていた。越後高田八十五万石から、会津、佐度百二十万石への大增封である。確かに会津は治めるのが難しい領地である。帰るのも無理無いところだが、場合が場合である。立場も立場である。

どうする、どうするの話がまたまたごたごたして、その間に上杉はまんまと会津に帰ってしまった。石田三成の佐和山蟄居を決めた頃には、景勝は越後からの六十里越えや仙道口から背炙り峠口などの、会津への攻略筋に頑強な備えを固めていた。

これは謀反だと家康は秀頼に報告し、会津征伐の大軍の兵を起こして、東へ出発した。当然、佐竹義宣もこの会津攻め的一端としての役割を担わされて出陣した。佐和山へ蟄居する三成から「適当にお願い致しますぞ。佐竹の役どころは大切になろうでのう」

囁かれていた。だが如何せん、義宣は戦支度などして上京してきていない。一度常陸へ戻り、戦闘態勢をとってのうえでなければ、会津へ戦をしにゆくわけにはいかない。それは家康も承知していた。以上に、三成と義宣それに上杉との友誼関係も承知していた。その上で義宣がどう出るかを観察しようとの腹である。

家康は秀忠を総大将として、家康直属の精鋭二万と、各地の大名八万の総勢十万の兵を下野小山に集結散開させた。義宣は仙道口手前に陣取りを命じられた。上杉が本気で戦うとすれば、真っ先に損害を受けるであろう陣所だ。しかし此処で戦は起こらないはずである。三成と義宣、との友誼関係を、上杉も心得ているからである。

「徳川殿はお主を疑っておいでじゃ。この攻め口では勝ち目はない。動かぬことじゃ」父義重は徳川との縁が深い。できればこんな戦をしたくないのが本音だろう、そのくらいは義宣も分かっている。家康も秀忠も、攻めよ、との命をまだ下していない。だが、いつその命が下るか分からない。その時どうするか、義宣は弥五郎と相談してあることを決めていた。

第二十二章

ある晩、弥五郎の所へ、上杉家家老の直江兼嗣から文が届いた。もちろん署名など有るはずがない密書である。ただ巴の印が文末に書かれているだけだ。弥五郎は直江とそれ程懇意にしたことはない。二、三度唐津で話をしたことが有る程度の仲である。それも兼嗣が水あたりで腹痛を起こしていたときに、薬籠の薬を与えただけのことで、陣中なら当たり前の話しである。

用心はしているのだ。川に小水を垂れてはならぬ、まして大便など以ての外ということは、士はもちろん雑兵でも心得ているはずだ。川の水など滅多に飲むものではない。

しかし水は川ばかりに有るものとは限らず、井戸にも、家々の水甕みずがめにもあり、その水にあたるということもある。第一腹痛が水あたりかどうか分かったものではない。ただ急な腹痛のときは水あたりをまず疑うのが当時の常識であった。

さいわい腹痛は治まり、そのまま弥五郎はそのことを忘れていた。そういえば、と弥五郎は思い出した。あの部将は確か二つ巴の絡んだ紋の陣羽織を着ていた、うむ、確か上杉家中とかいっていたような…と文を拵げた。

「何処から、何を言って寄越したのじゃ」

義宣が聞くと

「殿、上杉の家老、直江兼嗣殿からの書状にござります。石田三成殿、佐和山を出て、西国諸侯に檄を飛ばし、伏見城を落としたそうにござります。」

「何、石田殿が京で兵を起こされたか、して、それは確かなことなのであろうか」

「それにつきましては、家康殿直参の兵二万が、三、四日前から引き上げている模様にござります。さらに家康殿譜代の部将共も、どうやら中仙道に回り始めた様子」

「成る程、豊家御恩の我等には何も知らせず、石田と戦う算段じゃな」

やがて、秀忠から呼び出しが来て、三成謀反の議を知らされ、これこれの軍は我に従い京に転戦のため中仙道を進む。残りの軍はこのまま上杉を抑えて動かすな。」

義宣は「動かすな」の中に入れられた。

家康の我が物顔の態度に納得できない大名も多く、伏見城の徳川勢を打ち破った三成に加担する大名も多かった。大坂城の秀頼に陣頭指揮を申し入れたが、淀君がこれを断った。

かくて石田三成と徳川家康の決戦が行われることになった。石田側を西軍、徳川側を東軍と後世では呼ぶようになるが、西国大名が全て石田側というわけではない。加藤清正などは九州で西軍側の大名と戦っている。出羽でも現在の秋田県内で、かなりの規模の戦が行われている。関ヶ原の戦はその一点で戦われた戦ではなく、全国規模で戦われた、大規模な戦争であった。

義宣は会津攻めの陣を途中で解いて、常陸水戸に軍を引いた。上杉を攻める気は毛頭無く、兵を無駄に屯^{たむろ}させても、ろくなことにはならないからである。だが、関ヶ原での西軍のたった一日での敗戦は予想外であった。石田側の完敗である。天下は徳川のものになった。しまったと思ったがもう遅い。父義重は早速にも京大阪に出掛けて、詫びを入れてこいと義宣に言い聞かせた。

「まごまごしていると改易ものぞ」

義重の言葉は、重く義宣の心に響いた。

それにしても、と義宣は思う。石田殿は何故関ヶ原などで決戦を挑んだのであろうか。合点がいかなぬ。家康に従う者達の領地や城を、じっくり攻め落としつつ、豊臣家の勢力を拡大してゆくべきではなかったか。

上杉家の反応も納得できなかった。手薄になった小山の陣に、何故攻勢を掛けないのか。勇猛を以て鳴る上杉勢の威力をもってすれば、何処か一カ所くらい突破できたのではあるまいか。そのときには義宣も横合いから徳川勢に襲いかかるつもりであったのだが。

今更何を言っても始まらない。何か家康に上手く利用されたような気がする。そんなことばかりにとらわれて、義宣の思案は一向に冴えなかった。

それにしても、秀頼と家康に宛てた、弁明の機会を与えて貰いたい旨の手紙の返事が相も変わらず、今少し待たれよとばかりでは、不安が募るばかりである。

しかも、家康は豊臣型に加勢した大名達の処理に余念がない。三成等主犯は加茂河原で処刑された。残りのうち、或る者は改易に処され、或る者は減封され、流罪にされる者もいた。潰されたり減らされた大名達の領地、領国は、徳川に加勢した者達に、少しずつ報償として与えられた。

。

第二十三章

ようやく家康から呼び出し状が届いたのが、慶長七年(1602)二月も末のことであった。取るものも取り敢えず、とは言えそこそこの土産物を秀頼、家康に用意し、家臣二十人程を連れて、指定された大坂城に出むいた。

大坂城では出来る限り、考えられる限りの弁明を考えていた。だが赤館以北へ兵を進めなかった理由、上杉方との密約の取り決めなどについては、弁明の方法がなかった。

「弥五郎、何か良い知恵は無いか」

もちろん弥五郎にも、そんな知恵の持ち合わせはない。

「殿、負け戦に言い訳はござりませぬ」

却って^{たしな}窘められる始末だった。ああでもない、こうでもないの弁明は見苦しいと、義宣は覚悟を決めた。

家康は城の一角、いわば休みどころとでも言える一室に、義宣を案内した。そこで細かな詮索が行われるものと、義宣は覚悟していた。

ところが、家康は何も聞きただそうとはしない。座布団を勧め、にこやかに

「まあ、茶など一服召されては如何かな」

と手ずから茶を点ててくれた。まるで大坂城を我が物のように使っている。秀頼の居城だということなのである。そしてにこやかに

「いろいろと忙しゅう御座つてな。暫く大坂に滞在お願い申す」

とだけ言い渡された。義宣としては何を言われても逆らえない立場である。

「承知つかまつた」

と答えて退出した。

そのまま二月経った五月、義宣は今度は京都伏見城に呼び出された。

この度は正式な呼び出し状とあって、京都にいる大名の殆どが呼び集められ、大広間にずらりと並び座っている。正面の大床には秀頼が近習を従えて着座している。

義宣が案内役に導かれて大広間の末座に座った。殆ど裁きの形式である。何度このような場面が、この大広間で開かれたのであろうか、と義宣は思った。

一息つく間もなく、控え大名の左列筆頭にいた家康が立ち上がり、

「常陸の国の守、佐竹義宣義、中へ出ませい」

と呼ばわった。先日のにこやかさなど微塵もない、冷厳な表情である。義宣は掛かる仕打ちを受けた経験がない。だが、言われたとおりに振る舞うしかない。大広間の中央に進み出て、秀頼に向かい平伏した。

「佐竹とやら、この度の仕儀、甚だ遺憾至極である」

と幼い秀頼の声が頭の上を流れた。通常なら声を掛ける前に顔を上げさせるのだが、この度は平伏させたままであった。

続いて家康が用意された書状を開き、

「出羽の国の内、秋田、仙北両所進め置き候、全く御知行有るべく候なり、御朱印」

と読み上げ、脇の侍にこの書状を渡した。さらに声を上げ

「佐竹儀、下がって苦しゅうない。判物はんもつは廊ろうにて受けよ」

諸大名の居並ぶ前で、なんとも屈辱的な仕打ちであった。「御朱印」とまで読み上げるからは、その印は秀頼の物の筈だが、そこには家康の印がべったりと押しあてられていた。

だが何処かで、改易でなくて良かったと、ほっとする自分がいた。相手は征夷大將軍の称号を宮中に要望中との超大物である。多少のことは忍ばずばなるまい。しかし、判物に付きものの石高が無かった。それでも、早速ながら出羽の秋田とやらに引っ越さねばならない。一日遅れれば一日分、家康の気分を損なうであろう。

下城した義宣を迎えた佐竹の家臣は、秋田転封と聞いて声を呑んだ。次の瞬間、常陸ぐんぴょうへの帰り支度に取りかかった。京には義宣の率いてきた百人の鉄砲隊、さらに三百人に上る軍兵ぐんべいがいた。彼等に引き上げの命を下さねばならない。その殆どを召し放ちにしなければなるまい。言われずとも鉄砲は家康に献上する。とにかく仕事は急を要する。

「急げ」

との義宣の命である。二日後に常陸に向けて旅立ったのは、一行二十人余とはいえ、さすがの用意であった。その間に国元にこの結果を知らせる早馬や、食料の用意など、ろくな結果を期待出来ない、秋田への長旅の用意の故であったろう。二十人の中には、城中控えの間に詰めていた弥五郎他二人がいるのはもちろんであった。彼は

「殿、お疲れで御座りましたな」

といたわりの声をかけた。義宣は判物を弥五郎に渡すように近習に命じた。そして

「道々、国替えのこと、相談せねばならぬな」

溜息と共に弥五郎に呟いた。

「心得てござります」

言葉少なに弥五郎は答えた。すでにその頭は当初に連れて行く人数と名前などの編成を作り始めていた。

この道中なかなか難しい。のんびりゆっくり物見遊山の体では、家康の命令を小馬鹿にしていると受け取られかねない。かといって、急ぎすぎると家康の命に反抗して戦の用意に旅程を急いでいると、告げ口をするおべっか使いの大名がいるかもしれない。

家康としては、口実さえあれば佐竹を潰しにかかるであろう。何しろ常陸五十四万石といえ、日本全国の中でも七番目に数えられる大身の大名である。東北地方では伊達家に次ぐ存在なのだ。その動向は家康にとって油断のならないものだ。

そのことは義宣も弥五郎も、しっかり心得ている。

「弥五よ」

自分の馬の傍に扇子で招き寄せた。

「弥五よ、儂は思うのだが、このまま水戸に寄らずに、秋田に参ったら如何であろう」

大きく目を開いた弥五郎はしばらく無言の時を過ごした。ややあつて

「それが宜しいかと存じます。江戸へはお寄りになられませ。して、お供の人数は如何致しまするか」

「うむ、そちの考えをききたい」

またしばらく時が経った。蹄ひづめの音だけがぽくぽくと空しい。

「百騎前後では如何かと…」

京都に連れて行った家臣は、殆どを召し放ちにしたので、全く別の者を揃えねばならない。

領地変えには、住み着き郷土連中の反発が付きものである。当然彼等の反抗を抑えるだけの勢力が必要である。義宣と弥五郎との会話の内容もそれ以外ではない。

義宣は機先を制して早々と新領国への乗り込みを画策し、弥五郎は率いる兵力を計算していたのである。戦国はまだ終わっていなかった。

第二十四章

でわのくに

出羽国というのは、現代でいうと秋田、山形両県を含む広い範囲を指している地名である。

秋田、仙北両郡が大体现在の秋田県である。直近の山形県側には古来最上氏が勢力を保持している。其処へ行き着くまでの道々の城主達、特に赤館、桑折、庄内、新庄その他の領主、城主連への挨拶も考えねばならない。

すでに家康からそれらの道筋については、通行安全の令達が届いているはずだが、なにしろ敗軍の一行である。東軍味方の大名も多い。どんな嫌がらせをされるか、しれたものではない。だがあなど侮られてはならない。かといって刀剣沙汰に及ぶなど、この際絶対に避けねばならない。

「殿、鉄砲を五十丁持参いたしましょう。」

「百騎五百人といたして、そのうち百五十人を鉄砲隊といたしましょう。そのくらいなれば、事前に大御所様に届けば、お許しがありましょう」

「うむ、鉄砲はそのくらいが適当か。人数は五百人以内に抑えるが宜しかろうぞ」

ここで話されているのは、いわば秋田乗り込みの最前線の戦闘部隊についてである。実はその後続く、女房、子供、奉公人等々の一家一族の引っ越しの方が大仕事なのだが、その仕事の安全のためには、前線部隊の働きがものをいうのである。

まずいことに、秋田地方に詳しいものが、佐竹家中には居なかった。義宣も、弥五郎もこの新領地の広さ、狭さを知らない。判物にも石高が書いてないところをみると、家康やその側近も詳しいことを知らないのであろう。

一体この領地でどのくらいの家臣を養えるのか、そんな肝心のことさえ分からないのであった。とにかく新領に入って、地付きの者に様子を聞き、土地の実際を見聞しなければ何も始まらないのである。

「殿、人数は赤館に差し向けます故、左様お心得下され」

「あい分かった。よしなに差配せよ」

「かしこまって御座る」

九十三騎、四百五十人の佐竹勢が、やこない役内 峠越えで秋田湊城に入ったのは、この年九月十七日であった。

当然義宣の秋田入りの先発隊が、秋田に入っている。和田安房や須田美濃等であった。彼等からの書簡に寄れば、「横手より上仙北は御手に入り申さず」と、根強い抵抗勢力の存在を伝えてきている。それらを勘案した上での、弥五郎のまた義宣の転封対策であった。

現今ならば雄勝トンネルを瞬く間に通り抜けて、湯沢方面にほぼ直線的に続く国道が完成されているが、義宣入国の時代にはそんなわけには行かない。雄勝峠は名だたる難所で、峠越えの道さえ出来ていない。役内峠は大変な回り道で、今では山形側の道はハイキングコースとして或る程度整備されているが、秋田側は筆者の知る限り、獣道以上のものではなかった。

院内か横堀あたりの田畑の様子を見て、

「おお、米が採れるか、一安心じゃ」

と義宣が洩らした一言が今に伝えられているのは、如何に佐竹家中が、秋田について無知であったかを物語っている。転封十数年後にして、漸く秋田の石高二十万石余と弾きだせるようになるのだが、転封直後には、此処がどの程度の年貢を期待出来る土地か、皆目見当もつかなかった。弥五郎の測量技術が、一段と重要なものになったのは、理の当然である。

弥五郎は浪人中の父から、剣の手ほどきの他に、土地の計測法をも教えられていた。検地の時には、専門の計測士が仕事に当たるのだが、これがかなりいい加減な者が多く、秀吉の急ぎ仕事の結果と見るものが多かった。

「殿、この田の広さは、ちと合点がいきませぬ」

近習の弥五郎から、検地の結果に疑問を聞かされたことが、弥五郎を重用する始まりとなった。

佐竹家は平安、鎌倉以来四百年も続く旧家である。頼朝の奥州藤原氏討伐に参戦の折、頼朝から与えられたという、扇面に太陽の図柄が家紋となっている程の、歴史と伝統を誇る家柄である。いうところの守護大名である。その殆どは戦国の世を生き残れず、戦国大名に吸収されてしまったが、島津、佐竹など僅かな家が戦国を生き抜いた。

それだけに複雑な問題も抱えていた。家臣等も代々の者が多い。名前と家柄だけが自慢で、殆ど働きがない。それ以上に困るのは、自己の領地を後生大事と抱え込み、領主佐竹家の検地さえ、素直に受け入れようとしない。この者達にとっては、弥五郎の計測能力が迷惑至極なものであった。今まで多少の誤魔化しが通用していたのが、弥五郎によってそれが暴露されてしまった。

そもそも義宣が石田三成に味方しようとした理由の一つには、領国経営の一本化があった。三成は家老の島左近始め、近臣連中に高額の石高を与えることで有名であったが、土地そのものを与えることは少なかった。土地は何処までも自分の領地とし、その上がりを経営に与えることに徹した。形式的には給人として判物を与えるが、実質は禄米を支給していた。時には金銀のこともあった。これは秀吉の「大名は手活けの花」という政策の、自国領内での踏襲だったわけだが、これが深く義宣の同感するところだったのである。

なんとなれば、常陸佐竹家四百年の歴史の中で、家臣団は自己の領地に根を生やしてしまって、領主といえども、臣下の土地に迂闊に手を出せない状態になっていた。その為、臣下の真の石高は、義宣にも、前領主である父の義重にもわからない。

戦になっても、自己に利益がなければ、いっかな兵を動かそうとしない。国の中にまた国が在るようなものである。いわば佐竹いう大木の周りに、中小の木々が何本も群生しているようなものだった。主君と臣下は一本の木の幹と枝葉でなくてはならぬと、義宣は思っている。そこが守護大名と戦国大名との、主従関係の違いであることに、義宣は気付いている。だが古老連中は全く考えもしない。三成の下で新たな領国経営をしたい、それが義宣の真意であった。

筆頭家老の河井伊勢守は、すでに五十歳になろうという年齢であったが、前領主義重の意を受けて、徳川に味方すべく、陰で重臣達を説き回っていた。

「若殿は未だ、天下の形勢がお分かりではない。それを浪人の小倅風情が焚き付けおって、四百年來の御家をを傾かせるつもりじゃ」

伊勢守の説得が功を奏したのは、あながち義重時代からの重臣であったというばかりではなく、測量技術を駆使して厳しい検地を推し進める弥五郎への反感からでもある。

秀吉の検地、石高制による土農分離と年貢納入方の固定、士分の者への兵役の制定、及び領国の指定等、集権的封建制の基礎は秀吉と三成によって、ほとんどできあがっていた。家康はできれば三成を臣下に加えたかったであろう。権力の欲する政治体制は殆ど同じであった。

人間が違っていただけである。しかし、その違いの規模が小さければ主従に、大きければ戦になる。

関ヶ原の戦はその規模を、更に大きくしたに過ぎない。とはいえ三成側に味方した大名は九十家もあった。敗戦の結果として没収された領地は四百十四万六千二百石に上がった。

そればかりではなく、没収こそ免れたが、佐竹家のように^{げんぼう}減封された大名達の領地を合算すると、六百二十二万六千六百九十石という、巨大な領地が家康の手に入った。

当然全てを自分の領地にすることなどできない。直轄地に編入する地も少なくはないが、徳川一門への配分や譜代家臣の大名への取り立て、その他東軍参加の大名への、報償としての加封に、この土地が使われた。

この土地配分に、秀吉時代、つまりは三成以下の考案による石高制が大いに役立った。特に重要な土地、関八州や東海道には徳川家一門を配置し、秀吉恩顧の大名は遠隔の地に配された。徳川家絶対安泰体制の確立である。これを可能にしたのが、秀吉・三成コンビ制定の検地・石高制による身分制の確立であったのは、皮肉というべきであろう。

諸大名の勢力は決定的に弱体化した。特に家臣達は国替えにより土着性を断ち切れ、経済的手詰まりが露わになった。それまでは自己の領地を耕して俸禄の不足分を補っていたのが、これでは俸禄のみで生計を立てねばならない。

戦の無いときの武士ほど、始末の悪い者はない。主君の寄越す俸禄など多寡がしれている。主君その人が、経済的にゆきづまっているのである。十分な俸禄など寄越すはずがない。どころか、運が悪いとけちを付けられて召し放ち、要するに浪人に追いやられてしまう。

その浪人達を使う仕事や産業を、徳川家が用意することは、全くといっていいほど無かった。浪人の殆どが西軍側の大名の臣下であったから、徳川家で面倒を見るいわれはない、と突き放されても致し方のないことである。

第二十五章

敗者としての罰を受けねばならぬ立場に立った佐竹家は、筆頭家老の河井伊勢をその職から外し、その後へ家老格の筆頭用人として弥五郎を抜擢した。河井が職を解かれるのは、当面の首席家老として致し方のないところであったが、その後、弥五郎を用人としてではあっても起用することには、重臣達の不満が強かった。

弥五郎は西軍加担の主張者筆頭である。それが事もあろうに、家老格の用人筆頭とは、話しが逆ではないか。

しかも武田家の滅亡した今では、清和源氏直系を誇れる佐竹家の差配を、^{うじすじょう}氏素性の知れぬ浪人の息子に預けるなど、殿は一体何をお考えなのか、さっぱり理解致しかねるというわけである。

そうとしか考えられない重臣連中には、敵味方の欲する政治的目的が同じであることに、気づきもしなかった。家康が義宣を減封とはいえ、大名として残したことには、それなりの意味があったのである。

佐竹家としては、実際には戦われなかった関ヶ原が、その敗戦後に家内で戦われる事態になった。皮肉なことに、ここでは西軍が優勢を占め、その先頭に義宣がいるのだが、そこにさえ気が回らない古参連中としては、決着がまだついていないというわけである。

関ヶ原の戦いが慶長五年（1600年）。佐竹が秋田に^{てんぼう}転封を命じられたのが同七年。関ヶ原戦の^{ぼつぼう}罰封としては、最も遅い部類に入る。

その間佐竹家では、あるいは^{ひたち}常陸の本領を^{あんど}安堵されるのではないかと期待する者がかなりいた。ともかくも、領地さえ無事ならと上下共に息を^{ひそ}潜めている間は、弥五郎への風当たりも、それほどひどくはなかったのだ。

敗戦当事者たる義宣はもちろん、隠居の義重までが、將軍秀忠の江戸入りを迎えに、保土ヶ谷くんだりまで出掛け、徳川家の^{かんしん}歡心を買うのに大わらわだった。この転封までの二年間の月日が、佐竹家内の軋轢を少なからず拡大した。

しかし、家康が一度敵に回った者を、そのまま許すはずもなく、慶長七年五月、大坂城での転封令状の受け取りとなったのである。

義宣にとっては、転封は^{げんぼう}減封という面からすれば大きな不幸だったが、一面から言えば、かねてから望んでいた、佐竹家領の一本化を実現化するまたとない機会でもあった。弥五郎を家老格の筆頭用人に^{ぼつてき}抜擢しておいたのも、まことに^{じぎ}時宜を得た人事と、内心^{ひそ}密かに自負するところがあった。

「知行地といえども、^{おんくりまい}御蔵米と心得、^{かつしつかまつりこむよつ}勝手不仕様、段々被仰下候「だんだんおおせくだされそうろう」。臣下の知行地を一切無視して蔵米一本にするのは、さすがに旧家佐竹としてはできかねる。それゆえ、形だけのものとして土地を与えるが、それはただ預けただけのこと、そこから上がる録米だけがお前達のものなのだ。土地については、自分の物と錯覚して勝手なことをしてはならない、と義宣は領国経営の第一声として、家臣達に宣言した。

ところが、旧常陸領での^{やどりぎ}寄生木的領地支配に慣れ切っていた者には、この宣言の真意が分からない。武士の命は土地だ、土地こそ一所懸命の対象だという鎌倉以来の土豪根性に、この宣言を受け入れる土台が、まるでできていなかった。徳川政権を鎌倉幕府の再来とぼつかりに思い込んでいた。

義宣は弥五郎に呟いたことがある。

「三成殿も家康殿も、やりたいことは同じじゃな。やる人間が違うだけではないのか」

「まこと、家康殿もできれば三成殿を配下に加えたかったでありますよ」

「それはあるまい。豊臣のことはさておき、すべきことは、ほぼやりおおせているのではあるまいか。太閤殿下の下での」

「家康殿は熟した柿を、もぎとるだけの幸せ者というわけでありましょうか」

「さて、己の^{あしもと}足下の^{かんじんかなめ}始末が肝心要じゃのう。弥五郎よ、頼むぞ」

徳川政権を鎌倉幕府の再来と思い込んだ連中にとっては、ほれ見よ、^{きゅうとうぼくしゅ}旧套墨守のために、東軍お味方を主張したのだ。殿は我々宿老連の考えを入れず、西軍にお味方して敗軍の将に落ちぶれなされた。佐竹家を取り潰しに会わなかったのは、我等が兵を動かさなかったからだ、佐竹を護ったのは我等の働きで、分け与えられた土地はその恩賞である、との思い込みである。

土地の周囲に壕をめぐらし、土塁を築いて、常陸時代と何も変わらぬ館である。そうではない、そういう時代ではないのだ、と言いつ聞かせても、

この種の思い込みを説得することは極めて難しい。経済的な利害関係が深く絡んでいるだけに、主従関係にあっても困難なことである。

河井伊勢守が当初与えられたのは、横堀から院内にかけての極く狭い土地であったが、秋田全土の検地が終わる迄の暫定的な所領であった。だがそれを決めたのは弥五郎を中心とした、新進の近習連で、まずいことに、河井等古参の重臣達の知らない所で決まったことであった。

ここは元来、最上家の所領である。ところが、最上家本領は雄勝峠の西側にあり、院内はいわば山一つ越えた飛び地である。その上それ程肥沃な土地ではなく、山間の寒村に過ぎない。地形としては横堀から湯沢、横手、大曲に続く平野の山際の一部として、秋田の雄勝圏内に入るところである。

おまけに、最上家では、物故した領主の相続をめぐる激烈な内紛が生じ、とてもこの領地経営に人を割く余裕がない。一時佐竹家の差配の下において、いずれ何処か適当な土地と交換をと、転封早々最上家から申し入れを受けた所である。

そんな寒村とはいえ、久保田、大曲、角館、横手、湯沢とそうそうたる城下町が並ぶ、羽州街道唯一の、秋田と江戸をつなぐ要衝の地である。

現在は国道13号線が雄勝トンネルを掘り抜いて、あっという間に山形側から秋田側に抜けてしまうが、この時代はそうはいかない。有屋峠と称する峠道を越えて雄勝方面に入った。痕跡が残っていることは前述の通りである。この峠道、かなり遠回りをしたものらしく、後に義宣の命で雄勝峠越えの新道が造営された。

転封時に此の要衝を任されたのが、河井伊勢であった。江戸へ続く唯一の要衝ともなれば、此処を固めるのは相応の人物でなければならない。それには東軍味方説を主張して家康の覚えも目出度い河井伊勢を配すれば、その方の印象も大分緩和されるであろうとの配慮からの土地割りであった。義宣としても、重々の心配りの末の配置である。

ところが、川井伊勢は、常陸時代の自領に対するのと全く同様に、主要な道々に木戸番を配して、一々の出入りを監視し、土地人別を厳しく調べ直すなど、義宣の意図するところを、まるで無視した振る舞いである。

最上領の一時的預かり領である以上、いつ何時でも最上家に返却出来るよう、いわばどっちつかずの状態にしておくことが望ましい。たとえそれが見せかけ上のことにしてもである。

最上家としても、敗戦直後の佐竹の弱体を見て取っての、領地の一時的貸出しである。佐竹としてはその弱みを表面そのままにしておかねばならないほどの立場である。土地の新たな分割や防塁の新設など全く無用というよりは、却って最上家の誤解を受けやすい点では有害でさえ有る。まして、義宣がゆくゆくこの土地の自領編入をもくろんでいるとあれば、伊勢の所行は許せぬことであった。

第二十六章

義宣は弥五郎に河井領の検地を命じた。もちろん、本格的な検地を命じたわけではない。本格的な検地の用意は、未だ整っていない。仮の検地を理由に、伊勢守の気ままな行動を牽制させるためである。

国境の争いは戦国時代では当然のことながら、幕藩体制が整ってからもたえず起こっている。山の多い我が国の地形に起因するのも知れないが、一所懸命であればこそ、寸土を争うということになるのであろうか。だからして、自国領内の家臣領とはいえ、本格的な検地には、戦並みの用意が必要となる。秀吉の全国検地と石高制による国替えは、この事態を解消する手段であった。だが一朝一夕で解決出来る問題ではない。

仙北地方のほぼ中央を、雄物川が流れている。院内はその水源地帯に当たるのだが、この山中で多少の銀が採れることは、弥五郎も知っていた。その昔、平安時代の奥州藤原氏の繁栄を支えた金銀が、この辺りの鉱山から産出されたかもしれぬと書いた文書を見たこともあった。今はほとんど掘り尽くされて、微々たる量の銀が、堀子の生活を、かつがつ支えているに過ぎない。

雄物川沿いの農民の三男四男、伊達領鳴子辺りの獵師の倅など、耕す田畑も持たない流民のような者達が、半定住の形で細々と採掘に当たっていた。ところが、この年の雪解けで大雪崩を起こした上流水源地付近で、今までとは段違いの、豊かな^{つる}鉱脈が現れた。

喜んだのは河井伊勢守である。それ掘れ、やれ掘れと堀子をを督励して、大量の銀の発掘にかかった。伊勢守としては、久保田城(秋田城)築城の資金の一部にでもと勇躍したわけであった。もともと常陸は銅山の採掘が盛んなところで、銅でも銀でも鉛でも、採掘法に大した変わりはない。金属の種類による精錬法が違うだけである。

この銀山の堀子の中に、村山惣兵衛なる関ヶ原の浪人が混じっていた。この男、大谷刑部の下で侍大将まで勤めた者だったが、主君刑部が関ヶ原の開戦前に、二、三十人の役夫を付けて、

「何処へなと逃れて生き延びよ。この戦、石田殿の負けじゃわ。無駄死には儂だけで沢山じゃ」

と戦場から解放してくれた。惣兵衛はその足で、出羽の国迄逃げ足早く落ちてきていた。連れてきた役夫を、砂金拾いや、銀鉱の堀子に使い、自分は小野に掘っ立て小屋の如き物を作り住んでいた。当然銀鉱にもしばしば出掛けて、手下の役夫どもを監督した。

惣兵衛は文禄の役にも従軍し、その際朝鮮で鉱山冶金に関する知識を習得してきていた。弥五郎とは名護屋の陣営で知り合い、共に酒を飲み交わした仲でもあった。弥五郎よりも十歳近く年上であったが、気持ちよく交際できる相手として好印象を残した男であった。

河井領の検地に来た弥五郎が、惣兵衛に出会ったのは偶然であった。

「渋江様ではございませんか」

と声を掛けられても、しばらくは相手の顔が分からなかった。

「はて、どちらのお方であったか…甚だ失礼でござるが…」

言いさした弥五郎の頭に、朝鮮出兵の折に知り合った、大杉刑部配下の侍大将の顔が浮かんだ。

「は、は、は、いやお分かりにならぬのも無理ないことじゃ。山で働くと、かく色黒く皺もめっきり増えるでう」

惣兵衛が笑い出したのを弥五郎は手を上げて押しとどめ

「失礼いたしました。確か村山…惣兵衛殿ではござらぬか」

「いやいや、お覚え下さってか、して、河井様の領国検地においでとか聞きましたが、相変わらず佐竹殿の信用が厚いようで何よりじゃのう。どうじゃ、銀山でも見にくるか」
何気ない様子ながら、何か話したいことが有るようだ。

「行きたいのじゃが、多分河井殿がわしの銀山行きを邪魔するであろうよ。何か儂に見せたい物でもおありかの」

「河井が…何故じゃ。あの男、そう言えば少しおかしいのう。銀山奉行を差し置いて、儂の手下を使い、銀を堀りよる。佐竹殿のお命じかと思っているのだが、それにしてもなあ、あの堀り方は尋常ではないぞ、銀山奉行の箭田野殿の言うことも聞かずに、滅多矢鱈めったやたらに堀り散らかしてよ、これが殿のお言いつけじゃと喚いて居るわい。分からんかのう、派手に振る舞うことの危うさがよ。第一鉱山はてんかござん天下御山であろうがの、下手をすると…」

「そのことよ、このところ、西軍加担の大名連の取り潰しが激しいからのう」

「いや、お取り潰しは有るまいよ。その気ならお国換えの時に潰されて居ろう。心配なのは、再度のお国換えじゃよ。この上お国換えなどされたら、お取り潰しより酷いことになるうて。佐竹のお殿様もお主等もそのような余裕など、もはや一文ももたぬであろうが」

「その通りじゃ、分からぬのう。筆頭家老ともあろうお方のお振る舞いとは思えぬがのう」

「うむ、まあ、何とかせねばならぬのとは違うかのう」

さすがは侍大将まで勤めた男、惣兵衛は現状の意味する所をを正確に分かっていた。

「行こう、案内を頼む」

「今直ちにか」

「いや、殿にもともに御覧頂こう。その時には改めて知らせる。よしなに頼むぞ」

「ほう、佐竹殿は鉱山歩きなどなさるのか、鷹狩りで暇つぶしをするのが精々と思っ居ったが、風変わりな殿様よの」

「殿は常陸においでの際にも、御自ら鉱山を見聞なさるのが常じゃった」

「ふむ、誤魔化しは利かぬぞとの威しかな」

弥五郎は聞かぬ振りをした。常陸では銅山が主たる鉱山だったが、銅と言えども貴重な金属である。何よりも、近頃作られる銅銭の材料として、大量の銅が必要であった。鉄砲の部品としても使われる。銅でさえそんな有様である。

まして採れるのが銀ときは、義宣としては自分の目で確かめずにはいないだろうと、弥五郎には分かっていた。予告通り銀山見聞は義宣一行の行列が中心となった。弥五郎は家臣の一員として加わっている。

義宣は銀鉱石を見て

「これが銀を生む石か、精々掘るがよい。伊勢が励めばそのうち儂も長者になろうことよ」と笑った。

他意の無い冗談であったが、伊勢はこれを激励の言葉と受け取って感激した。

惣兵衛は鉱脈を一わたり見て回り、

「これほどの鉱脈は、生野の銀山も及ぶまい。とてつもない銀がうまっているようだ」と嘆息を洩らした。